広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	唐代文学における醜女 : 唐詩に描かれなかった女性像
Author(s)	橘, 英範
Citation	中國中世文學研究 , 54 : 34 - 73
Issue Date	2008-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051404
Right	
Relation	

唐代文学における醜女 ―唐詩に描かれなかった女性像―

橘　英範

はじめに

中国文学に見られる女性美に関しては多くの優れた研究があるが、その一方で、醜女に関する研究は非常に少ないようである。[1] それは、美女を描いたおびただしい数の作品が残されているのに対し、醜女を描いた作品が極めて少ないという事情―これは中国文学に限ったことではないであろうが―にもよるであろう。本稿は、そのあまり顧みられなかった醜女というテーマについて扱おうとするものである。

後に見るように、筆者が専門とする唐詩には醜女はほとんど登場せず、唐代では俗文学を中心に描かれるのみであるから、その方面の専門家に委ねるべきテーマなのかもしれないが、唐詩の研究においても、次のような観点から多少の意義があるのではないかと思い、調査を行うこととした。

それは第一に、唐詩に描かれた女性像とともに、描かれなかった女性像という面からも、唐詩の性格を考えることができるのではないかという点である。

唐詩に描かれた女性像に関しては多くの先行文献があり、[2] 筆者も拙い文章を草したことがあるが、[3] 描かれなかった女性像という方向からの研究はあまりないように思われる。しかし、どのような女性が描かれなかったかという方向からも唐詩の一つの特徴を浮かび上がらせることが可能ではないだろうか。本稿に上記の副題を付けた所以である。

第二に、醜女は美女の裏返しであり、醜女の描写を検討することによって、唐代における美女の条件を知ることができるのではないかという点である。

美女の条件は時代・文化によって変化するが、唐代の美女像が論じられる場合には、出土資料や図像資料が用いられることがほとんどのようである。その理由は色々あるのだろうが、一つには、例えば張競氏の指摘を待つまでもなく、[4] 中国文学における美女の描写が、非常に守旧的・画一的なものであるためであろう。例えば、黒く豊かな髪、はっきりした瞳と白い歯（すなわち「明眸皓歯」）、白く細い指などが美女の典型的な描写としてすぐに想起される。前代の作品の表現を継承することに重き

を置く中国の古典文学においては、このような類型的描写が大量に再生産されて行き、それらを集めてみても、美女の条件がはっきりとは分からないことが多い。よく知られるように、図像資料等から見ると、唐代は豊満な女性が美人の条件だったことが分かるが、唐詩においては六朝以前と変わらず「細腰」の美女が描かれ続けている。美女の描写から美女の具体的な条件が分からないとしたら、醜女の描写を詳しく見ることによって、あるいは美女の条件が具体的に明らかにできる可能性があるのではないかと考えたのである。(5)

以上のように考えて、この拙い文章を草してみることとした。このため、本稿の目的とするところは二つある。第一は、唐代までの醜女文学の流れを概観し、唐詩に醜女の描写がほとんど見られない理由を考えることである。(6) 第二には、醜女描写を分析することによって、唐代における美女の条件について考察を試みることである。

一　中国史上著名な醜女

醜女に関する文学作品を紹介する前に、本節では中国史上の有名な醜女（伝説的な人物もあるが）について触れておきたい。次節以降に紹介する作品の中でも時折り言及されており、また、わずかであるが醜女の容貌に関する描写があるので、ここでまとめておくこととする。

1 嫫母（黄帝の妃）

伝説上の醜女。やはり伝説上の帝王である黄帝の第四妃であるとされる。古く先秦の文献に登場し、すでに醜女の代名詞として用いられる。

『戦国策』楚策・『荀子』賦・『韓詩外伝』四等に引く賦において、美女である閭娵および美男である子奢と対比して、醜男の刁父と並んで用いられており、『楚辞』九章「惜往日」・『呂氏春秋』孝行覧等にも見えている。これらの書物には醜女であるとか黄帝の妃であるとかいう内容の注が施されているのみだが、『淮南子』説山訓で、「嫫母にも美しき所有り、西施にも醜き所有り（嫫母有所美、西施有所醜）」（＝嫫母のような醜女にも美しいところがあり西施のような美人にも醜いところがある）と述べている注に、「嫫母は古の醜女にして、行ひは貞正、故に美しき所有りと曰ふ（嫫母古之醜女、而行貞正、故曰有所美）」と記されており、徳を備えた女性という認識が古くからあったことがうかがえる。

醜女の代名詞として用いられる傾向が強いため、諸書に見えるが、その醜貌を具体的に描いたものは見当たらないようだ。

2 鍾離春（無塩女、戦国時代、斉の宣王の后）

漢・劉向『列女伝』弁通に見える醜女。斉の無塩の鍾離春は、容貌が非常に醜く、四十を過ぎても嫁のもらい手がなかったので、自ら宣王のもとを訪ねた。宣王が会ってみると、鍾離春は突然姿を消して宣王を驚かせた後、

その政治を批判する立派な発言を行った。それに感動した宣王は、自らの行いを改めて、鍾離春を后とした。

その容貌は「其の人と爲りは極醜無雙、臼頭深目、長壯大節、卬鼻結喉、肥項少髪、折腰出胸、皮膚若漆の若し（其爲人極醜無雙、臼頭深目、長壯大節、卬鼻結喉、肥項少髪、折腰出胸、皮膚若漆）」と描写されている。[7]

この話は『新序』にも見え、「無塩如漆」は『蒙求』の標題にもなっている。

3宿瘤女（戦国時代、斉の閔王の后）

同じく『列女伝』弁通に見える醜女。斉の東郭の採桑の女性で、うなじに大きなこぶがあったので宿瘤女というとされる。閔王が出遊した時、だれもが見物に行ったのに宿瘤女は桑摘みを止めなかった。それを不思議に思った閔王は宿瘤女と会い、賢女であることを知って后とした。

その容貌は「項に大瘤有り（項有大瘤）」（＝うなじに大きな瘤があった）と記されるのみ。

4狐逐女（戦国時代、斉の襄王の大臣の妻）

やはり漢・劉向『列女伝』弁通に見える醜女。斉の即墨の女性で、父母を亡くし、容貌が醜かったので、何度も村から逐われ、結婚相手がいなかった。自ら襄王のもとを訪ね、治道を論じて襄王に気に入られ、大臣の妻となった。

その容貌については「狀　甚だ醜し（狀甚醜）」（＝容貌はとても醜くかった）と記されるのみ。

5孟光（梁鴻の妻）

後漢の隠者梁鴻の妻。三十になるまで嫁がず、その理由を父母に問われて梁鴻のような賢者に嫁ぎたいと言った。それを聞いた梁鴻が嫁に迎え、孟光は化粧し着飾って出かけたが梁鴻は口をきかない。その理由を尋ねると、ぼろを着てともに深山に隠れるような女性を願っていたと答えたので、ぼろに着替え髪を無造作にたばね、それでこそ私の妻だと言われた。後に梁鴻が金持ちの家で雇われている時、食事のたびに孟光が膳を眉の高さまで捧げて（「挙案斉眉」ということばの出典として有名）梁鴻に進めているのを見て、主人は梁鴻がただ者ではないと見抜いたという（『後漢書』逸民伝）。

その容貌は「狀は肥醜にして黒く、力は石臼を擧ぐ（狀肥醜而黒、力擧石臼）」（＝太って醜く色黒であり、力は石臼を持ち上げるほどだった）と記されている。

6黄氏（諸葛亮の妻）

三国蜀の名臣諸葛孔明の妻。沔南の名士である黄承彦は、妻を探していた諸葛孔明に、自分に醜い娘がいるが才能は釣り合っていると勧めた。孔明が承知したので承彦はすぐに娘を車に乗せて孔明に嫁がせた。孔明は笑い

者になり、郷里では「孔明の婦を擇ぶを作す莫かれ、正に阿承の醜女を得ん（莫作孔明擇婦、正得阿承醜女）」（＝孔明のような嫁探しをするな、承彦の娘のような醜女をつかまされるぞ）という諺ができた（『三国志』蜀志諸葛亮伝に引く『襄陽記』）。

娘については父の黄承彦のセリフの中に「身に醜女有り、黄頭にして黒色、しかるに才は相ひ配するに堪へたり（身有醜女、黄頭黒色、而才堪相配）」と表現されている。[8]

7阮氏（許允の妻）

魏の許允の妻。阮共の娘、阮侃（字は徳如）の妹。許允は婚礼が終わっても醜い妻の部屋に入ろうとしなかった。「阮家の人が醜女を嫁入りさせたのは何か考えがあってのことだ」と人に勧められ、許允は妻の部屋に入ったが、顔を見るなり出て行こうとしたので、妻は夫の裾をとらえて引き留めた。夫が「婦に四徳有り、卿　其の幾か有る（婦有四徳、卿有其幾）」（＝婦人には四つの徳があるというが、お前はそのうち幾つを持っている？）と尋ねたところ、「新婦　乏しき所は唯だ容のみ（新婦所乏唯容爾）」（＝私に足りないのは「婦容」のみです）といい、さらに夫の行動を諫めた。これにより妻を尊敬するようになった（『世説新語』賢媛）。

容貌については「奇醜なり（奇醜）」（＝ひどく醜かった）と記されるのみ。

8賈南風（賈皇后）

西晋賈充の娘、恵帝の皇后。恵帝が皇太子の頃、衛瓘の美しい娘と賈充の醜い娘のどちらを妻にするか悩んだが、結局実力者賈充の娘である南風を妻とした。南風は性格が残忍で嫉妬深く、多くの宮女を殺害した。後恵帝が即位すると賈皇后が政治の実権を握り、八王の乱を引き起こし、最後は自殺に追い込まれた（『晋書』后妃伝上、恵賈皇后伝）。

『晋書』には「賈家の種は妒にして子少なく、醜くして短黒なり（賈家種妒而少子、醜而短黒）」（＝賈氏は嫉妬深くて子供が少なく、醜くて背が低く色黒である）と記されている。

以上の醜女のうち、1・2・5・7は、中国古代四大醜女と称されているようだ。[9]

ここで、これらの文献における醜女の描写について触れておくことにしたい。次節以降に見る醜女を描いた文学における醜女描写とこれらの文献では、醜女描写の持つ意味に違いがあると思われるからである。

ここに取り挙げた醜女の描写に関してまずいえることは、当然予想されたことではあるが、いずれも醜というのが女性にとってマイナスの属性と捉えられていることである。古く『周禮』九嬪に見える婦人が備えるべき四つの徳目に「婦容」（＝婉娩）があるように、醜女は女性の持つべき重要な徳の一つを欠くものとされたのである。[10]

また、女性の徳との関連で興味深いのは、諸葛孔明に叙述の中心がある6と最後の8を除き、残りの醜女は、容貌は醜いもののそれぞれ立派な徳を備えた女性として記されていることである。婦容を持たない醜女は、他の徳が非常にすぐれていなければ、歴史に名を残せなかったのであろうし、別の角度から見れば、すぐれた徳を持つ称えるべき女性が醜貌であることは、世間の目を引くものだったのでもあろう。8の賈南風の場合は、容貌よりも八王の乱を引き起こしたという事跡の方で有名な人物といえよう。その醜貌は、残虐な行いがあったことによって誇張されているだろうし、色白で美しい衛瓘の娘との対比の必要があって記されたということもありそうだ。

歴史上著名な醜女の多くが徳を備えていたとされることは、また、容貌と女性の徳（現代風に言えば「顔と性格」）が別のものであると考えられていたことを示してもいよう。中国文学における醜女に関する先行論文においては、妬婦や怠惰な女性を描いた作品の中で、その言動や容貌が醜女に似るものも一律に論じられることがあるが、この点から見れば、やはり醜女と妬婦その他は分けて考えるべきであると思われる。[11]

さらに、これらの醜女の描写について指摘しておかなければならないのは、醜であることは確かにマイナスの属性であるものの、醜であることを自体を嘲笑する意識があまり見られない点であろう。[12]次節以降に見るように、醜女を描く文学作品が主に醜女の容貌を細かく描写することによって醜女を嘲笑の対象とするのに対し、歴史書を中心としたこれらの文献では、女性の徳を称える方に中心があり、容貌の描写にほとんど関心を示していないようだ。2のようにやや詳しく描写するものであっても、全体における比重はごく少なくなっている。[13]

本節の最後に、以上の文献における醜女の描写をまとめておこう。取り挙げた文献の時代は、次節で扱うものと重なっているが、ひとまずここで整理しておく。

先に述べたように、これらの文献の場合は容貌の描写にはあまり熱心ではない。いくらかでも醜貌の具体的描写があるのは、2・3・5・6・8の五人であるが、2を除けば容貌の描写はほんの僅かであり、醜女の徳を描くことに中心があることがうかがえる。そのうち、3の「項有大瘤」という描写は、いわば病気であり、当時の感覚からすれば醜貌の一部であるにしても、美女の裏返しとしての醜貌の考察対象とすることはできないであろう。ここでは残りの五人の醜女描写について触れておく。

複数の醜女描写に共通するものとしては、5・6・8に見られる色が黒いという点が挙げられよう。[14]2の「皮膚若漆」というのも、漆のように色が黒いことをいうのであるとすれば、同じことを述べていると思われる。

もう一つ共通するのは、太っていることに関する表現で、5に身体全体の太さ、2に「肥項」と首の太さが挙

げられている。

また、髪の毛について触れているのが2と6で、2では「少髪」と髪の毛の少なさが、6では「黄頭」と髪の色の薄さが描写されている。

最も描写が具体的な2では、さらに「臼頭」「深目」「長壮」「大節」「卬鼻」「結喉」「折腰」「出胸」などの表現が見られる。「臼頭」は頂点がくぼんだ平らな頭、「深目」はくぼんだ目、「長壮」は背が高いこと、[15]「大節」は骨格がいかついこと。「卬鼻」は上を向いた鼻、「結喉」は腫れ物のある喉または喉ぼとけが突き出た喉。「折腰」は折れ曲がった腰、「出胸」は鳩胸。

以上のような醜貌描写が、中国史上有名な醜女について記した文献に見えるのだが、それでは文学作品においては、女性の醜貌はどのように描かれているだろうか。次節ではこの点について考察してみたい。

二　唐以前の文学における醜女

次に本節では、唐代以前の文学作品に見られる醜女について見ておきたい。伏氏・福井氏の研究等に基づき、以下に四つの例を挙げることとする。

9『荘子』天運

西施が胸を病んで眉をしかめるのを見て美しいと思った村の醜女が、まねをして村人の前で眉をしかめて見せたところ、金持ちは堅く門を閉ざして出歩こうとせず、貧乏人は妻子を連れて逃げ出した。

いわゆる「顰みに倣う」の故事である。容貌については「醜人」というのみで、詳しい描写はない。『荘子』は伝統的な四部分類では子部すなわち思想の書とされるものだが、『荘子』に収められる数々の寓話は文学作品と見なせようし、極めて有名な故事でもあるので、ここに挙げることとした。[16]

10宋玉「登徒子好色賦」(『文選』巻一九)

『文選』に収められる宋玉の有名な作品。この賦は、登徒子という人物が宋玉は好色であると楚王に非難し、楚王がこのことを宋玉に尋ねると、登徒子こそが好色で自分は好色ではないと答えるいう設定になっている。賦の序文でその設定が説明されるが、宋玉は、自分は東隣りに住む極めつきの美人から秋波を送られて無視し続けているのに対し、登徒子の妻はふた目と見られない容貌なのに、登徒子は妻との間に五人も子供がいると述べる。

その中で登徒子の妻は「其の妻は蓬頭　攣耳、齵脣歴齒、旁行　踽僂、又た疥にして且つ痔なり（其妻蓬頭攣耳、齵脣歴齒、旁行踽僂、又疥且痔）」と描写されている。[17]

11潘岳「醜婦賦」(佚)

この賦は現在散佚しているが、潘岳にこの作品があったことは、劉勰『文心雕龍』諧讔に「然り而うして懿文の士も、未だ轡を枉ぐるを免れず。潘岳醜婦の屬、束晳

賣餅の類、尤めて之に效ひ、蓋し百を以て數ふ（然而懿文之士、未免枉轡。潘岳醜婦之屬、束晳賣餅之類、尤而效之、蓋以百數）」と見えることから分かる。

その内容については明らかではないが、「諧讕（諧謔と隠語）」のうちの「諧」の方の例として挙げられていることから推測すれば、滑稽を主とした作品だったようである。なお、この劉勰はこの「諧」の方の先例の一つとして、2の「登徒子好色賦」を挙げている。ただし、「登徒子好色賦」の方は諷刺の作として評価するが、潘岳のこの作は批判の対象となっている。[18]

12劉思眞「醜婦賦」（『初學記』巻一九等）

この賦は『初學記』巻一九「醜人」の条や『錦繡萬花谷』續集五「醜人」の条、『古今事文類聚』後集一二「醜女」の条等に引かれて伝えられており、また『太平御覽』巻三八二「醜婦人」の条にも一部が引用されている。[19]

劉思眞については未詳で、六朝の人とする説もあれば、初唐の人とする説もある。[20] 現在の段階では、この作品は『初學記』の収録対象となっている初唐の時代までに作られたものと考えるほかはないだろう。そういう意味では、唐代の作品かもしれないものではあるが、後に述べるように、次節以降で取り挙げる唐代の醜女文学とは、扱われ方や形式の面で大きく異なっており、初唐の作品であるとしても、六朝文学の流れを引いたものと考えられる。そもそも文学の変化と王朝の変化とが必ずしも一致するわけではなかろう。ここでは、六朝からの流れを汲むこの作品を、唐以前の文献とともに扱うことにしたい。

この賦は、世の中には立派な女性を妻に迎えている者も多いのに対して、この私は何の因果かひどい容貌の妻を持っている、と嘆く内容である。

人皆得令室、我命獨何咎。不遇姜任德、正値醜惡婦。
才質陋且儉、姿容劇嫫母。鹿頭彌猴面、椎額復出口。
折頰靨樓鼻、兩眼顯如臼。膚如老桑皮、耳如側兩手。
頭如研米槌、髮如掘掃帚。惡觀醜儀容、不媚似鋪首。
闇鈍拙梳髻、刻畫又更醜。妝頰如狗舐、額上獨偏厚。
朱脣如踏血、畫眉如鼠負。傅粉堆頤下、面中不徧有。
領如鹽豉囊、袖如常拭釜。履中如和泥、爪甲長有垢。
脚皺可容箸、熟視令人嘔。

人はみな美しい妻を手に入れているのに、私だけ一体何の罪があるというのか。大姜・大任のような徳のある女性にはめぐり会えず、この醜い妻と出会うとは。性質はいやしくてけち、容貌はかの嫫母よりもひどい。シカのような頭にサルのような顔、木づちのようなひたいで口がとび出している。鼻筋が低くてえくぼさえ鼻よりも出ており、両眼はうすのようにくぼんでいる。肌は桑の老木の樹皮のようで、耳は顔のそばに両手を広げたよう。頭はちびた米つき棒のようで、髪は禿げた箒のよう。醜いお姿を見られるのをいやがり、媚び

ることをせず、門飾りの金具のようだ。愚かで鈍く、髪を整えるのが下手で、飾り立てるとさらに醜くなる。頬に化粧すれば犬が舐めたようで、額の上だけがひどい厚塗りになっている。口紅を塗った唇は血を踏んだようで（？）、描いた眉はわらじ虫のよう。おしろいを付けるとあごの下にたまり、顔にまんべんなく付いていない。えりは味噌を入れる袋のようで、袖はいつも釜を拭いているよう。くつの中は泥を混ぜ合わせたようで、爪は長くて垢がたまっている。足のあかぎれには箸でも入りそうで、じっと見ていると吐き気をもよおす。[21]

未詳の表現も多いが、まず容姿（特に顔）の醜さが描かれ、次に化粧をするとさらにひどいと描写され、最後は見ていると吐き気を催すと述べて結ばれているようだ。

この作は賦とはいうものの、全篇五言句の隔句韻で一韻到底となっており、形式上は五言詩と変わるところがない。そのためか、詩として扱われている資料もある。[22]この点は重要と思われるので、後で触れることにしたい。

以上の四つが唐以前の資料といえるだろう。[23]すでに散佚しているものもあるが、ここで、前節の例と比較するために、これらの資料における醜女表現の持つ意味を考えておこう。

9では、身の程を知らず西施のまねをする醜女の愚かさが描かれているが、これは、時勢の変化に気付かず周の道を行おうとする孔子を批判するために並べられた寓話の一つである。醜女をマイナスイメージで用いていることは明らかであるが、問題とされているのは醜貌そのものではなく、それに気付いていないことの愚かさであり、その点では、前節で挙げた例に近いものである。醜貌自体の具体的描写がほとんどないことは、そのことを物語るものであろう。

10の醜女描写の場合、登徒子の好色を批判するために用いられたもので、長文ではないものの、醜貌が細かく描写されている。ただし、文章の中心は美女を描くことにあり、美女との対比の上で醜女描写が行われているといえよう。

この醜女描写においては、容貌の醜さだけでなく、登徒子の妻が痔を患っているなどという、常識的に考えれば宋玉に知りうるはずのないことまで描写されている。卑近な喩えで恐縮であるが、これは俗に「お前のかあちゃんデベソ」というようなもので、罵語の要素が含まれていると考えてよいのではないか。そして、罵語がしばしば誇張とユーモアに深い関わりを持つように、登徒子の妻の描写も誇張とユーモアの表現であると思われる。だからこそ、劉勰の『文心雕龍』も「諧」の先例となる作品として挙げたのである。[24]

散佚しているためはっきりとは分からないが、潘岳の11の例も、『文心雕龍』が「諧」の例としていることから

も、醜女を嘲笑する作であったと推測される。ただ、福井氏も指摘されるように、劉勰は「登徒子好色賦」については「意は微諷に在り、觀るに足る者有り（意在微諷、有足觀者）」と、諷諭の込められた作として価値を認めているのに対し、この作品については先に引いたような厳しい評価をしており、諷刺の意味が薄らいだ、「登徒子好色賦」よりもさらに笑いの要素が強いものであったと想像される。

12の例は自分の妻の醜貌を描いている点、他人の妻を描いた10の例とは異なっている。この例の場合、醜女を妻に持った男の悲哀が詠じられていて、読者の同情を誘う作とする見方もできようが、全三十句のほとんどを費やして醜貌が描かれており、[25] 夫の心情は最初の部分に少し述べられているのみであることを考えれば、これもやはり醜女を妻に持った男が、ぼやきながらその容貌の醜さを並べ立てることによって、読者の笑いを誘う作ということになるのではないだろうか。

伏氏第二論文および福井氏は、六朝時代の同類の賦が冒頭で語り物の形式を取っていることに注目しておられるが、この賦で最初に夫が登場して「みなさんは美人を妻にお持ちだが、私は何の因果かこのような妻で…」と語り始めるのは、それと同じく、語り物の形式を取っているといえるだろう。現代日本でいえば、ぼやき漫談のようなものである。

このことは先に述べたこの賦の形式とも関わっており、伏氏第二論文も指摘するように、この賦を含む六朝期の同類の賦が、賦といいながら五言詩と同様の形式であるのは、民間で伝承された楽府、特に五言の叙事的な楽府との深いつながりを感じさせる。

このような作品が、玄宗の時に官修された『初學記』に載せられているのは、恐らく重要なことである。初学者が文章作成の参考にするための類書に、[26] 醜女を描いた作品が載せられているということは、唐の文人たちがこれを参考にして、さらに醜女文学を発展させる可能性もあったと思われるからである。さらにそれが五言詩との関わりが深い形式であることは、詩の中にも醜女という題材が詠じられるようになる可能性も有していたはずである。ところが、実際はそうならなかった。この点については、次節以降で論ずることとし、ここでは、10・12（そして恐らくは11も）の醜女描写が、醜女を笑い攻撃する要素を持っていることのみ確認しておきたい。

本節の最後に、以上の文献に見られる醜女描写に、前節で考察したものも加えてまとめ、当時の美人像を見ておこう。劉思眞のものは初唐の作である可能性もあるが、『初學記』に収められた、六朝以前からの流れを汲む、盛唐以降の人たちにとって規範となるものということで、ここで扱うこととし、便宜上、以下の叙述でも本節までの資料を「唐以前」、次節以降の資料を「唐代」と記すことにしたい。なお、張競氏によれば、壁画資料において

は、初唐までは六朝から引き続きやせ型美人が描かれ、盛唐から豊満型美人に移り変わるという。[27] 美術と文学および実際の変化が一致するとは限らないが、美人の条件が変化したのが盛唐頃であるとすれば、劉思眞のものが初唐であったとしても、ここでまとめて扱っても大きな問題はなさそうである。

醜女の具体的描写が見られるのは、10の「登徒子好色賦」と12の「醜婦賦」である。

まず両者に見られ、かつ前節で見た醜女表現と共通するものとして、髪の毛に関する表現がある。10の「蓬頭」、12の「髪如掘掃帚」ともにぼさぼさの髪の描写のようであり、前節で見た表現が少なさと色の薄さを表現していたのとはやや異なるが、これら多くの資料に見られることから、髪の毛が重要な要素であったことがうかがえる。

前節で見られたものと共通する表現として、まず10と共通するものを挙げれば、体型（腰）に関するものが挙げられよう。2に「折腰」の表現があったが、10には腰が曲がった様子をいう「踽偻」の表現がある。

一方、12と共通するものはいくつかあり、第一に、肌（色）に関係する表現が挙げられる。前節では色の黒さが多く表現されていたが、「膚如老桑皮」という表現も、肌が桑の木の皮のようにごつごつしていることとともに、色が濃いことも表していよう。また「獼猴面」も、サルのような赤ら顔を指している可能性もあろう。劉石氏が醜人の二つの条件の一つに挙げたように、[28] 色が黒いことも重要な要素であったようだ。

次に、目に関する表現が挙げられる。2では「深目」と表現されていたが、12では「兩眼顯如臼」の表現があり、やはり落ちくぼんだ目が醜女の条件となっているようだ。

また、頭に関する表現が挙げられよう。3では「臼頭」という表現があったが、12には「頭如研米槌」の句がある。いずれも頭頂部が平らであることをいうのであろう。12の「鹿頭」も同じかもしれない。

最後に、描写の内容はやや異なるが、鼻に関する表現も共通している。2では上を向いた鼻（「卬鼻」）が用いられていたが、ここでは「折頞齶樓鼻」という表現があり、低い鼻が描写されている。

前節の資料には見られなかったが、10と12に共通して見られるものとしては、口に関する表現と耳に関する表現が挙げられる。

いずれも表現内容はやや異なるが、口については10に「齞脣」といい、12に「出口」という。前者は口が閉じず歯が見えること、後者は口が突き出ていることと解釈した。

耳については、10に「攣耳」といい、12に「耳如側兩手」という。前者については曲がった耳、後者については両手を広げたような大きな耳と解釈した。

次に、一方にのみ見られる表現を見ておこう。

まず10のみに見られる表現としては、「歴齒」と「旁行」

が挙げられよう。[29]「歴齒」はまばらな歯をいう。「旁行」は容貌というより行動を描写したことばで、きごちない歩き方をいうようだ。

12のみに見られる表現は多い。まず顔に関しては、「鹿頭」「獼猴面」「椎額」「齷樓鼻」の表現が挙げられる。このうち、「鹿頭」はよく分からないが、先に述べたように「臼頭」と同様、平たい頭をいうか。「獼猴面」は先に肌の色の方で触れたが、サルのようにしわの多い顔のことかもしれない。「椎額」もよく分からないが、出っ張った額か、狭い額をいうと考えた。

12で非常に多くの紙幅を費やしている表現として、化粧した顔の描写が挙げられる。「闇鈍拙梳髻、刻畫又更醜。妝頰如狗舐、額上獨偏厚。朱脣如踏血、畫眉如鼠負。傅粉堆頤下、面中不徧有」と、頰・額・唇・眉・あごなどが表現されているが、いずれも容貌の醜さというより化粧下手の面が強調されたもののようである。

これに続いて、「領如鹽豉囊、袖如常拭釜。履中如和泥、爪甲長有垢」というのは、不潔さの描写というべきもの。ただ、「爪甲長有垢」の表現からすると、爪はあまり長くない方がよいとされていたのかもしれない。

続く「脚皺可容箸」という表現は、病気であろうし、不潔さの表現の続きでもあろうが、肌が荒れていることが表現されており、なめらかな肌を美とする考えが表れているかもしれない。

最後に、前節で挙げた資料にのみ見えた表現としては、太っていることと、背が高すぎること（「長壯」）骨格がいかついこと（「大節」）、突起のある喉（「結喉」）、鳩胸（「出胸」）が挙げられる。

以上、前節と本節で描写された、唐以前の美人の条件をまとめれば、次のようになろうか。

背は高からず低からずで、太っていない。鳩胸でなく、腰も曲がっていない、すらりとした体型。肌は白く、なめらかである。頭の形は扁平でなく、首はすんなりと細い。髪は黒く、豊かで、なめらかである。額は出っ張っておらず（狭すぎず）、目がくぼんでいてはいけない。鼻は上を向いたり低すぎたりせず、鼻筋が通っている。口はとび出さず、しっかりと結ばれて、歯並びがよい。耳は大きすぎず、曲がっていない。化粧が上手で、清潔であり、歩き方が洗練されている。

以上が唐以前の美女であるとしたら、唐代ではどのように描かれているだろうか。次節以降、唐代の状況を考察してみたい。

三　唐詩における醜女

次に、本節では、筆者が専門とする唐詩に登場する醜女について触れておく。

先に触れたように、唐詩の中には醜女はほとんど出てこない。出てきたとしても、非常に一般化・抽象化された用いられ方がほとんどである。いくつか例を挙げてみ

よう（便宜上テキストは全て『全唐詩』を用い、必要部分だけを抜き出すこととする）。

13李白「古風」五十九首其三十五（『全唐詩』一六一）

醜女來效顰　醜女　來たりて顰みに效ひ
還家驚四鄰　家に還りて　四鄰を驚かす
壽陵失本步　壽陵　本步を失ひ
笑殺邯鄲人　笑殺す　邯鄲の人

14白居易「青冢」（『全唐詩』四二五）

禍福安可知　禍福　安んぞ知るべけんや
美顏不如醜　美顏は　醜きに如かず

13の李白の例は、有名な「古風」の連作のうちの一首で、その冒頭の四句であるが、9に引いた『荘子』の故事を用いた表現であり、次の邯鄲の歩みの故事とともに、自分の本来の姿を見失った比喩として用いられたものである。醜女を登場させて具体的に描くというものとはいえない。

14の白居易の例は、王昭君を詠じた詩であるが、画家に醜く描かれたという故事についての感想を述べる中に、美しさが醜いことに劣る場合もあると表現したものである。すなわち具体的なある女性の醜さではなく、一般論として用いられているものといえよう。

唐詩において醜女に言及する場合はこのような例がほとんどである。その他の例としては、次のようなものが挙げられる。

15杜甫「負薪行」（『全唐詩』二二一）

至老雙鬢只垂頸　老いに至るも　雙鬢　只だ頸に垂れ
野花山葉銀釵並　野花　山葉　銀釵並ぶ
筋力登危集市門　筋力　危ふきに登り　市門に集まり
死生射利兼鹽井　死生　利を射て　鹽井を兼ぬ
面妝首飾雜啼痕　面妝　首飾　啼痕を雜へ
地褊衣寒困石根　地は褊に　衣は寒くして　石根に困す
若道巫山女粗醜　若し　巫山　女粗醜なりと道はば
何得此有昭君村　何ぞ　此に昭君村有るを得ん

16劉叉「古怨」（『全唐詩』三九五。同二〇は劉乂の作とする）

君莫嫌醜婦　君　醜婦を嫌ふ莫れ
醜婦死守貞　醜婦　死して貞を守る
山頭一怪石　山頭　一怪石
長作望夫名　長く望夫の名を作す
鳥有並翼飛　鳥に　翼を並べて飛ぶ有り
獸有比肩行　獸に　肩を比べて行く有り
丈夫不立義　丈夫　義を立てずんば

豈如鳥獸情　豈に鳥獸の情に如かんや

15は夔州のたきぎ売りの女性を詠じた作の後半部分。労働にやつれた女性が詠じられ、髪型や化粧などが詳しく描写されているが、これは困窮して身なりにかまっていられないことを表現したもので、容貌が醜い訳ではない。それは末尾の二句からも明らかであろう。

16は閨怨詩風の詩題だが、男性に対して女性に誠実であるよう呼びかける作となっており、一般的な閨怨詩とは趣の異なるものである。この詩は珍しく冒頭で醜女が主人公に設定されているので全文を挙げたが、主眼は醜女が「死守貞」ものであり、男性はそれに誠実に答えないと鳥獸にも劣ると述べることにあり、醜女の容貌は少しも描写されていない。

以上に挙げた唐詩の例を六朝の醜女表現と比較した時、これら唐詩の例にはいずれも笑いと攻撃＝嘲笑の要素がないことが明らかであるといえよう。醜女描写にはこの嘲笑性という側面が重要であることを、これらの例は物語っているようである。

ただ、醜女を描く詩が全く作られなかった訳ではなさそうだ。例えば『全唐詩』七〇一には、宋の陳應行『吟窗雜錄』から引かれた王貞白の「醜婦」の「白髪にして未だ媒に逢はず、景に對して　且く裴回す（白髪未逢媒、對景且裴回）」という佚句が残されている。詩題からすると、この詩は醜婦を主人公として、醜貌が詳しく描写されていた可能性もある。しかしこの詩は二句しか残されていない。醜女描写があったとしても、陳應行によって削られたのである。

最後に、唐詩において醜女描写を用いたごく稀な例の一つとして、錢鍾書氏・伏氏第一論文も指摘する『雲溪友議』澧陽讌の条に引かれる例を挙げよう。[30]

17李宣古「贈崔雲娘」

何事最堪悲　何事ぞ　最も悲しむに堪ふる
雲娘只首奇　雲娘　只首に奇なり
瘦拳抛令急　瘦拳　令を抛つこと急に
長嘴出歌遲　長嘴　歌を出すこと遲し
只怕肩侵鬢　只だ怕る　肩の鬢を侵すを
惟愁骨透皮　惟だ愁ふ　骨の皮を透すを
不須當戸立　戸に當たって立つを須ひず
頭上有鍾馗　頭上に　鍾馗有り[31]

この詩では、痩せたこぶしや大きい口、いかり肩で骨と皮ばかりという様子が具体的に描かれ、「戸口に立ってはいけない、鍾馗様と間違えられる」と結ばれている。

『雲溪友議』によれば、崔雲娘という痩せた妓女が、人をからかってばかりいる上に、詩歌の才能を鼻にかけていたため、李宣古が宴席で贈った作品であり、この詩を贈られた崔雲娘は、口をつぐむようになったという。ここには明らかに醜貌を描いて相手を嘲笑する意図が見

えていよう。

実は、この詩の作者である晩唐の李宣古自身も、宴席でふざけてばかりいて人をあなどる人物であったとされており、また、この詩は『全唐詩』では巻五五二の李宣古の条ではなく、小説に登場する詩を集めた巻八七〇に収められている。このことからは、恐らく妓女を嘲笑するような詩は、まともな詩人であれば作らないようなものであり、作ったとしても、たまたま小説に記録されて残ることはあっても、詩集に収めて後に伝えようとするような作ではないと考えられていたことがうかがえるのではないだろうか。王貞白の作品にあった醜女描写が削られたとしたら、それも同じような考えによるものだと思われる。

四　醜女が具体的に描かれた唐代文学

次に、本節では、唐代文学における醜女について取り挙げる。

唐詩にはほとんど醜女は登場しないと述べたが、この状況は他の文学ジャンルでも同様のようであり、散文においても、また文言小説においても、醜女が登場することは少なく、また、その容貌を詳しく描写した例は見当たらないようだ。

管見の及んだ範囲では、散文においては、例えば李白の「上安州李長史書」（『全唐文』巻三四八）に「昔徐邈は醉ふに縁りて賞するも、魏王　却って以て賢と爲し、無鹽　醜に因りて獲るも、齊君　之を待すること逾いよ厚し（昔徐邈縁醉而賞、魏王却以爲賢、無鹽因醜而獲、齊君待之逾厚）」といい、黄滔の「祭右省李常侍洵」（『全唐文』巻八二六）に「故に隣家の醜婦の、競ひて西子の眉を顰め、洛下の諸生の、皆な謝公の鼻を掩ふを得たり（故得隣家醜婦、競顰西子之眉、洛下諸生、皆掩謝公之鼻）」というような、一般的な用例があるのみのようである。[32]

小説においては、醜女描写が皆無という訳ではないが、それでも『太平廣記』巻二〇一に引く『朝野僉載』に、則天武后の時、兵部郎中の朱前疑という人物が、美しい妻を持ちながら、洛陽の殖業坊の西門の酒場にいる醜い女性をひどく好んだという話があり、その容貌が「蓬頭垢面、傴肩　皤腹、寢惡の状、世を擧げて無き所なり（蓬頭垢面、傴肩皤腹、寢惡之状、擧世所無）」（＝ぼさぼさ頭にあかだらけの顔、いかり肩で太鼓腹、醜悪な容貌は世間に二人とない）と簡単に描かれていたり、また、『太平廣記』巻二八六に引く『投荒雜録』に、海中に妖術を使う醜女がおり、ある北方の男に死んでも後悔しないと思わせるほど愛情を抱かせ、男が女を捨てて北に帰ろうとしたが、舟が進まなかったという話があり、その容貌が一言「蓬頭傴僂」と記されていたりするのみという状況である。[33]

ただ、唐代の文学の中にも、詳しく醜女の容貌を描写したものがある。それは敦煌に残された俗文学の文献で

ある。伏氏第一論文等によって四例を以下に挙げ、その描写について検討してみたい。

18敦煌変文「醜女縁起」

敦煌で発見された変文と呼ばれる語り物のテキストの一つ（最近では全てを語り物と考えることについては異説もあるようだが）。S4511・P3048・S2114・P3592・P2945。五種類のテキストが残っていることは、この話が民衆に人気があったことを示していよう。

波斯匿国の王の娘金剛醜女が、前世で辟支仏の容貌を醜いと思った因縁で、世にも稀な醜女に生まれつき、父である王の力で夫を得るが、夫がその醜貌を友人に見せたくないと述べたことを恥じ、仏に祈願したところ、仏が現れて美しい容貌に変化するという話である。

この話は『雑寶藏經』巻二「波斯匿王醜女賴提縁」・『撰集百喩經』巻八比丘尼品第八「波斯匿王醜女縁」・『賢愚經』巻二「波斯匿王女金剛品第八」などに見えており、インドの仏典に基づくものと思われる。ただし、仏典においては醜貌の描写は非常に簡単なものであり、韻文を用いて長々と醜貌を描写している部分は、中国における醜女観を背景にしていると考えられる。[034]

醜女の容貌は三首の韻文に次のように記されている。なお、容貌に関係のない前後の部分と、韻文の間の地の文は省略した。

醜陋世間人總有　醜き者は世に数あるものの
未見今朝惡相儀　今のこの悪相　見しこともなし
崇崎蹋蹈如龜鱉　身はこごまりて　亀か　鱉
渾身又似野豬皮　全身あたかも　猪の皮
饒你丹青心裏巧　たとい丹青に巧みなりとも
彩色千般畫不成　如何に色を使い分けても描ききれぬ

獸頭渾是可憎皃　獣めく頭　まことに憎らし
國内計應無比並　国じゅう二人とはあらざるべし
若論此女形貌相　この娘の姿かたちよりすれば
長大將身娉阿誰　年ごろとなって誰にか嫁がせん

女縁醜陋世間希　娘の醜さ　世にも稀
渾身一似黑韌皮　上から下までなめし革も同然
雙脚跟頭皴又僻　両足はがに股　皮膚はざらつき外り返る
髮如驢尾一枝枝　髪はちょろちょろ　驢馬のしっぽ
看人左右和身轉　人見るときは身ごと右に左に向き直り
舉步何曾會禮儀　歩む姿は礼儀も作法もあらばこそ
十指纖纖如露柱　十指はほっそりと露柱のごとく
一雙眼子似木槌梨　両の眼は木のふし穴

公主全無窈窕　王女にはたおやかさまるでなし
差事非常不小　この変事　なみなみならず
上脣半斤有餘　上の唇は重さ半斤あまり
鼻孔竹筒渾小　鼻の穴は太さは竹筒以上
生來未省歡喜　生まれ来たりて未だかつて顔ほころばず
見說三年一笑　聞けば笑うは三年に一度のみと
覓他行步風流　歩む姿の風流もがなと思えば
却是趙士禳脚　あなにくや趙士の脚絆もさこそ[35]

この例の醜貌描写は少々複雑な意味を持っていよう。この話の最大の山場は、主人公である醜女が夫から疎んじられて悲しみ、仏に祈願することによって美女になるという部分であろう。聴衆はこの時、醜女に感情移入し、ハッピーエンドを迎えたことに満足を覚えるはずである。もし聴衆が最初からこの女性に感情移入するとすれば、長々と描写されるその醜さは、悲しいこと・忌むべきものということになろう。しかし、上に挙げた醜貌描写には、唐以前の醜女描写と同じように、やはり醜貌を描写することによって聴衆の笑いを得る意図があるのではないだろうか。

この醜貌の描写は、冒頭近く、醜い姫が誕生した部分のすぐ後に置かれており、この醜貌描写があった後に、王による婿捜しが始まって、ストーリーが動き始める。そして、この後は醜貌の詳しい描写はなく、単に醜い（「醜陋」）とか化け物（「精怪」）というような表現が時々用いられるのみである。恐らく聴衆は、最初はこの姫には特に感情移入することなくその醜貌描写を楽しんで笑い飛ばし、その後、なかなか結婚が決まらなかったり夫に疎んじられたりするストーリー展開の中で、次第にこの醜女に感情移入していくのであろう。そう解すれば、この醜女描写もやはり嘲笑の要素を持っているといえるだろう。

19敦煌変文「破魔變」

やはり変文の一つである。P2187・S3491。魔王が様々な手段で仏の修行を邪魔をするという内容である。その中に、魔王が仏を惑わすために遣わした三人の美しい娘が、仏によって醜い老婆の姿に変えられてしまうという部分がある。三人は改心して仏に願うことによって美しい姿を取り戻す。すなわち前の「醜女縁起」の裏返しのような話である。

老婆の容貌であり、眉の白さなどの表現があって、老醜の側面をも持つが、年齢に関係のない描写もあるようなので、取り挙げることとした。その醜貌は、地の文と韻文に次のように表現されている

於是世尊垂金色臂、指魔女身、三箇一時化作老母。
且眼如珠盞、面似火曹、額闊頭尖、胸高鼻曲、髮黃齒黑、眉白口青、面皺如皮裹髑髏、項長一似筋頭鎚子。

渾身錦繡、變成兩幅布裙、頭上梳釵、變作一團亂蛇。
身膡項縮、恰似害凍老鵶、腰曲脚長、一似過秋穀鶴。
渾身笑具、甚是屍骸。三箇相看、面無顏色。心中不分、
把鏡照看、空留百醜之形、不見千嬌之貌。姉妹三箇、
道何言語。

そこで世尊は金色の臂を垂れて魔女の身を指さしますと、とたんに三人は老婆に変じました。眼は灯心皿(?)のごとく、顏は火曹に似て、額は広く頭は尖り、胸は高く鼻は曲がり、髪は黄色く歯は黒く、眉は白く口は青く、顏は皺よって、まるで皮の張りついた髑髏のよう、首は長くて串にさした団子のようです。全身の錦繡は二幅の麻のスカートに変わり、頭の上の梳釵は一群の蛇と変わりました。身はかがまり首は縮まり、寒さに凍てた烏同然。腰は曲がり脚は長く、秋を過ぎた穀□の鳥のよう。身じゅうが笑いの種、いやはや大した態たらく。三人は互いに顏見合わせ、顏色もありません。心中いまいましく、鏡に映して見れば、百の醜が残っているばかり、千の嬌は見あたりません。姉妹三人、どう申しましたろう、

不是天爲孽　天の為せる禍にはあらず
都緣自作灾　すべて自ら招きし災
嬌容何處去　嬌姿は何処へ去りしか
醜陋此時來　今ぞ醜陋わが身に及ぶ
眼裏睛如火　目の玉は火の如く
胸前瘻似魁　胸のこぶは魁に似る
欲歸天上去　天上に帰らんと思えども
羞見醜頭顋　醜き顏を見らるるが羞かし(36)

この例の場合、主人公である仏の修行を邪魔しにきた魔女が醜女になるのであるから、その姿が醜ければ醜いほど、聴衆は嘲笑して快哉を叫んだことであろう。先に「醜女縁起」の裏返しのような話と述べたが、この醜女描写の方が単純といえよう。この文章の醜女の描写もやはり嘲笑の側面を持っているようである。

20 趙洽「醜婦賦」

敦煌文書の中に残された賦。P3716・S5752。作者趙洽についてはよく分からない。何人もの醜女を目にしてきたが、中にこんな醜女がいる、と醜女の様子を描いたものである。

畜眼已來醜數、則有兮一人。幡飛蓬兮成鬢、塗嫩椹兮爲脣。無兮利之伎量、有姤毒之精神。天生面上没媚、鼻頭足津。閑則如能窮舌、饞則佯推有娠。躭眠嗜睡、愛斧憎薪。有笑兮如哭、有戲兮如嗔。眉間有千般碎皺、項底有百道粗筋。貯多年之垢汚、停累月之重皴。嚴平未卜懸知惡、許負遙看早道貧。
　或人忽然而嘆曰、可羞可恥、難生難死、甚没精神、甚没擧止。結束則前褰後跢、披掩則藏頭出齒。以犢速

兮爲行、以屈焠兮爲跪。五色鬼之小婦、三家村之大姉。豪豪横横、或恐馬而以驚驢、咋咋鄒鄒、即喧鄰兮聒里。仡脂磨邏之面、惡努脝肛之觜。尓乃只愛說非、何曾道是。聞人行兮撼戰、見客過兮自捶。

打女而高聲怒氣、何忍更塗香相貌、擺敷粧眉。只是醜上添醜、衰中道衰。告怨屈者胡粉、稱苦痛者胭脂。唯學嫉中出行、當十惡裏矜持。厭蠱家問法、符書上趁師。人家有此怪疹、亦寔枉食枉衣。則須糠火發遣、不得稽遲。勿客死外、寧可生離。所有男女總收取、所有資藉任將隨。好去好住、任信任依。各自前得努力、苦兮樂兮焉知。

これまで目にした醜女たちのなかに、一人次のような醜女がいる。ぼうぼうに乱れた髪をなびかせ、黒い桑の実を口紅にしている。鋭いことばを用いる技量はなく、ずるくてあくどい心を持っている。生まれつき、顔には媚態がなく、鼻には鼻水があふれている。暇な時には、どれだけしゃべれるか極めようとしているようにおしゃべりし、腹が減った時には、妊娠しているふりをする。寝るのが好きで寝てばかり、斧を惜しんで薪を憎むような性格である。笑っていると泣いているようだし、遊んでいると怒っているようだ。眉間にはたくさんの細かい皺があり、うなじには何本もの太い筋がある。長年の垢をたくわえており、何ヶ月分ものひびわれをとどめている。かの占い師の厳君平は、占いをするまでもなく、遠くからでもこの醜女は「悪」であると知り、かの人相見の許負は、はるか遠くから見て、この醜女は「貧」であるというだろう。

ある人がふと嘆いていった。「恥ずかしい、恥ずかしい。生きるのも難しく、死ぬのも難しい。どういう心なのだろう、どういう立ち居振る舞いなのだろう。衣装を付ければ、前を掲げすぎて後ろでつまづき、頭巾をかぶれば、頭を隠して歯がむき出しになる。歩く時にはぶるぶる震え、ひざまづく時には蝶つがいのように折れ曲がる。五方の鬼の若い嫁、さびれた村の上の姉といったところ。たけだけしくて勝手気まま、馬を怖がらせロバを驚かし、がやがやとうるさくて、隣まで騒がしく里の中がうるさくなる。悪鬼のような顔に厚く脂肪がつき、腫れてふくれた唇を醜く突き出す。お前は『いやだ』と言うばかりで、『はい』と言ったことがない。人が歩いていると聞けば挑発し、客が来るのを見れば殴ろうとする。」

この女をぶつと大声で怒り、（ここに一句抜けているとされる）。どうして耐えられよう、この顔にさらに香水を塗り、化粧した眉に飾りを並べるのに。醜い上にさらに醜さを添え、衰えた中で衰えを言うようなものだ。冤罪を主張するのはおしろい、苦痛を訴えるのは臙脂である。嫉妬の面で傑出することを学び、十悪の中で才能を誇る。怪しいまじないの家で術を習い、道教の文書の中に先生を探す。人の家にこの怪しい病気（＝醜女）があれば、誠に食事や衣服の無駄である。

だから、米ぬかで作った松明をともして追い出し、ぐずぐずさせないようにすべきである。外でのたれ死にしなくても、むしろ生き別れた方がよいのだ。全ての息子・娘は全員連れて行かせ、全ての財産は好きなように持って行かせよ。「さよなら」「さよなら」と挨拶し、好きなようにさせ、行きたいところに行かせなさい。それぞれがみな前を向き、努力することができたなら、前途は苦であるか楽であるか、どうして知ることができようか。[37]

難解な表現が多く、不明の部分も多いが、この例の場合、こんな醜女がいるぞ、という始まり方のようであり、醜女の具体的な様子を描写して、こんな醜女は追い出してしまえと結ばれている。醜女は語りの主体とはやや関係の薄い人物として描かれていて、この醜女を嘲笑する要素が強いものと思われる。

以前の作品の醜女描写がほぼ容貌に集中していたのに対し、この例では性格や立ち居振る舞い、話し方に及んでいるのが特徴的であり、そして、その性格等も攻撃の対象となっている。前の二つの変文の例では、いずれも仏心を起こしたことにより後に美女に変わるので、性格的なことについては攻撃できなかったのであろうが、この例の場合は、性格面等の悪さを描写することにより、醜貌を攻撃する免罪符としているかのようである。この例では、醜女をひどく攻撃しているため、ユーモアというより攻撃の要素が強く感じられる。

21白行簡「大樂賦」

正式名称は「陰陽天地交歓大樂賦」、やはり敦煌文書の中に残された賦である。P2539。作者として白居易の弟である白行簡（776～826）の名が記されている。

性交の楽しみを賦の形で表現した長篇の韻文。その中に、時には醜女と情を交わすことがあるとして、醜女の容貌が描写されている。

更有悪者。醜黑矬肥、臀高面欹。或口大而齸錡、或鼻曲而累垂、髻不梳而散乱、衣不斂而離披。或即驚天之咲、吐棒地之詞。喚嫫母為美嫗、呼敦洽為妖姫、遭宿瘤罵、被无塩欺、梁鴻妻見之極哂、許允婦遇之□嗤。效頻則人言精魅、倚門則鬼號鍾馗。艱難相遇、勉強為之、醋氣時聞、毎念糟糠之婦、荒姪不擇、豈思同於枕席之姫。此乃是曠絶之大急也、非猒飫之所宜。

さらに、醜い女性がいる。色黒でずんぐり、臀部が高く顔がゆがんでいる。口は大きくてこしきのようで、鼻は曲がって垂れ下がり、髪はとかないのでぼうぼう、服はととのえないのではだけている。天を揺るがすような高笑いをし、地面にたたきつけるような乱暴なことばを吐く。これに比べればかの嫫母も美しいおうな、かの敦洽も妖艶な姫と呼べるほど。宿瘤にはののしられ無塩には馬鹿にされ、梁鴻の妻もこれを見れば笑い

が止まらず、許允の婦もこれに遇えば□笑うだろう。西施のまねをして眉をひそめれば人々は化け物と言い、門の所に立っていれば幽霊は鍾馗様かと思う。相手がいなくて困っている時には、こういう醜女と無理に情を交わすこともあるが、やきもちをやくのを聞くと苦労を共にした妻を思い、ひどい淫乱さはかつて同衾した美女と全く異なっている。こういう醜女は長く相手がいない時の急場しのぎであり、日頃満ち足りている者のすべきことではない。[38]

この例の場合、具体的に容貌を描写しているのは最初の数句のみであり、言動の描写や故事の羅列が中心となっている。容貌のみならず、言動についても描写されている点、そしてその性格も批判の対象となっている点は、20の趙洽「醜婦賦」の例と共通している。やはり、性格的な面を強調することにより、安心して醜貌を描写できるという面があるのだろう。

なお、この「大楽賦」の場合、単なる醜女ではなく、性交の対象としての醜女であり、他のものと同列に考えるには注意を要する。特に、この賦は房中術の書との深い関わりが指摘されており、この部分の醜女描写にも古来の房中術の書の影響がある可能性もある。しかし、『医心方』房内篇「惡女」の条に引く『玉房祕訣』等の醜女描写と比較する限りでは、例えば同じく口が大きいことを述べても、『玉房祕訣』では「大口」というのに対し、「大樂賦」では「或口大而甗錡」と表現しているなどの違いがあり、はっきりとした影響は見られないようだ。[39]唐代の醜女観を反映した醜女描写と考えてよいのではないだろうか。

以上が現在までに筆者が探し得た唐代文学における醜女描写である。[40]

これらの例についてまとめておこう。18～21の四種の醜女を描写した文献は、全て敦煌に残されていたものであり、もし敦煌から膨大な文書が偶然発見されていなければ、存在すら忘れられていたはずのものである。これらの敦煌文書がなかったら、唐代には醜女の描写はほぼなくなってしまっていたと考えられたことであろう。

また、具体的な醜女描写がこれら敦煌の文書のみに残っているということは、詩における醜女描写の例が小説に引かれたものの中にのみ残されていることと通じており、士大夫の文学においては詠じるものではないとされていたこと、また、醜女の描写は卑俗な文学において行われるものであったことがうかがえよう。

つまり、以上に見た醜女文学の流れをまとめれば、次のようになろう。

六朝までの醜女の文学の状況を見ると、古く宋玉が先鞭をつけた「登徒子好色賦」が、文章制作の規範となった『文選』にも収められていた。それを承けて、著名な文人である潘岳が「醜婦賦」を作ったことが『文心雕龍』

にも記録されており、劉勰も「百を以て數ふ」といっているほど、一時期は大量の作品が作られたことが想像される。一方で、潘岳の作は散佚しており、劉勰が眉をひそめるほど大量に作られた割には、他の作者のものも残されておらず、文学の正統な題材とは見なされていなかった様子もうかがえる。

ただ、無名の人物の作ではあるが、玄宗の時に官修された類書である『初學記』にも、劉思眞の「醜婦賦」が収められており、醜女というものは唐代の士大夫の文学の中でも発展する可能性を残したテーマであったといえるだろう。この「醜婦賦」は、初唐に作られた可能性もあるが、六朝の俗賦の流れを引いたものと位置づけられると同時に、全篇五言で隔句韻・一韻到底の形式を持っており、詩のジャンルにも引き継がれやすいものだったと考えられる。

ところが実際には、唐代においては、士大夫の文学には醜女の描写は見られず、詩・散文・文言小説の各ジャンルにおいて、醜女を描いた作品はほとんど残されていない。残されているのは、小説に書き留められた妓女を嘲笑する詩や、敦煌の変文・俗賦などの中のみである。

この醜女という題材を考えるのに鍵となるのが、笑いと攻撃の要素であろう。すでに宋玉の「登徒子好色賦」・劉思眞の「醜婦賦」からもうかがえるように、醜女の描写は笑いと攻撃を伴うものであった。妓女を嘲笑した悪意に満ちた詩においても、また敦煌の変文や俗賦の中での執拗な醜貌の描写においても、醜貌を笑いものにし攻撃しようとする意識が強く感じられる。

唐代になって、士大夫の作る詩の中で醜女を描かれることがほとんどなかったのは、あるいはそのような詩が作られたとしてもほとんど残されなかったのは、この醜女を笑い攻撃するという行為が、詩の中で行うべきではないことと考えられたためであろう。

このように考えると、劉思眞の「醜婦賦」はターニングポイントとなる作品だったといえるだろう。宋玉からの流れを引き、また五言詩とも見なしうるこの作品が『初學記』に収められた時、盛唐以降の文人たちの文学＝雅の文学へと発展する可能性と、六朝からの俗賦の系列の文学＝俗の文学へと発展する可能性を両方持ち合わせていたであろう。ところが、盛唐以降の文人たちはそれを受け継ぐことなく、醜女という題材は雅の文学という表舞台から姿を消した。あるいは李宣古のように、唐の文人たちも手慰みにこのような作品を作ったかもしれないが、それは後世に伝えるべきものとはされなかったであろう。一方で、俗の文学の方では醜女という題材が脈々と引き継がれて、醜女の容貌をこと細かに描く作品が作られ続け、恐らくは民衆の間では強く支持されていた。しかしそれも、後に伝えるべきものとは考えられず、消費されて痕跡を残さないまま消えていってしまい、わずかな生き残りが敦煌の石室の中に数百年の間眠っていたのである。

五　唐代の文献における醜女描写

最後に本節では、唐代の文献における醜女の描写を分析し、本稿のもう一つの目的であった美女の具体的条件について触れておくことにしたい。対象とする作品は、18～21の敦煌における文献の他、17の妓女を嘲笑した詩をも含めることとする。

1　継承された表現

まず、前の時代と共通するもの、または前の時代の延長線上にあると思われるもののうち、主なものを挙げよう。一部は引き継がれていても変化の方が大きいと思われるものは、次項に回すこととする。なお、怠惰な生活ぶりや粗野な言動など、性格に関する描写に関しては、当時の人々はそれらをも含めて醜と感じていたのであろうが、本稿の目的から外れるので、ここでは省略することにする。

最も言及が多いのが髪の毛で、18に「髪如驢尾一枝枝」、20に「幡飛蓬兮成鬢」、21に「髻不梳而散乱」と、ぼさぼさの髪を描写する。また、19では色について「髪黄」といっており、前代と同じく、なめらかな黒髪が美人の条件の一つだったことがうかがえる。

色の黒さの描写も相変わらず多く、18に「渾身又似野豬皮」・「渾身一似黒韌皮」、19に「面似火曹」、21に「醜黒」の表現が見られる。色が白いことが美人の条件の一つだったことも変わりないようだ。

色とも共通するが、肌に関して、18に「渾身又似野豬皮」「皴又僻」の表現があり、また、「十指纖纖如露柱」も伏注に従えば、肌とも関わる表現である。20には首筋について「項底有百道粗筋」の表現、限定されていない「停累月之重皴」の表現がある。なめらかな肌が美人の条件ということも変わっていない。

また、体型の面では、腰が曲がっていることが、18に「崇崎蹋蹈如龜鱉」、19に「身膝」「腰曲」と見えている。ただし、19の場合は老婆になっているためもあろう。また鳩胸について19に「胸高」「胸前瘻似魁」の描写が見える。また、前の時代には見られなかった表現であるが、21「臀高」というのも、臀部が出っ張っていて、まっすぐでないことをいうと思われ、同じ傾向のものといえよう。すんなりとまっすぐな体型がよいとされたのも相変わらずのようだ。

顔に関するものでは、まずしわに関する描写が多い。肌に関する表現で挙げたものをのぞけば、19では「面皺如皮裹髑髏」と老婆の顔を描写し、20では「眉間有千般碎皺」と眉間のしわを描写している。張りのある顔も引き続き美人の条件のようである。ただし、21では「仡脂磨邏之面」と述べており、脂肪が付きすぎているのもよくないようだ。

次に、鼻に関する描写で、19に「鼻曲」といい、21に「或鼻曲而累垂」といっており、鼻筋が通っているのが

美人の条件であることも前代から引き継がれている。鼻のその他の面に関する描写は、次項で扱う。

行動・態度に関しては、歩き方について18に「看人左右和身轉、舉步何曾會禮儀」・「却是趙士襪脚」、20に「結束則前褰後跢」・「以犢速兮爲行」の表現があり、以前と同じように、歩き方が重視されていたことが分かる。

また、化粧下手について20に「何忍更塗香相貌、擺敷粧眉。只是醜上添醜、衰中道衰。告怨屈者胡粉、稱苦痛者胭脂。」の表現があり、不潔さについて20に「貯多年之垢汚」というような表現があることも、前の時代から継承されたものといえよう。

2変化・出現した表現

続いて、前の時代と異なるもの・前の時代にはなかったものを挙げることとする。

まず、複雑な様相を呈しているのが、肉付きに関する表現である。21では「矬肥」の表現があり、これのみを見れば、太っていることは相変わらずマイナス要素のようである。顔について「仡脂磨邏之面」と脂肪が付いていることを描写するのも、太っているのをマイナス評価したものといえそうだ。[41] その一方で、17には「骨透皮」という表現が見えており、肉付きの悪さが醜として描写される。17では「瘦拳」という語も用いられていて、こぶしに限定される表現ではあるが、やはり痩せていることが醜貌の条件の一つとなっている。

17の詩の場合、嘲笑される妓女が実際に痩せていたとされているので、17に痩せたことの描写があるのは当然かもしれないが、その他の作品にも痩せていることを匂わせる表現が散見する。19は老婆の表現ではあるが、先に顔のしわに関する例としても挙げた「面皺如皮裹髑髏」は、顔の肉付きの悪さを表現しているといえ、17の「骨透皮」とも似た描写である。

これと関連するのが身体の各部位の長さ等に関係する表現で、19で「項長一似筯頭饎子」と首の長さ、「脚長」と足の長さを描写しているのは、やせ形であることを思わせる。[42] 頭の形についても、前の時代では頭が扁平でないことが美人の条件だったようだが、19では「頭尖」と、尖った形が醜いとされている。これも面長でやせた感じであることと関わるのではないだろうか。額に関する表現は、前の時代の表現が出っ張ったことをいうのか狭いことをいうのか不明なのではっきりとはいえないが、19で「額闊」と額の広さを挙げるのも、前の時代と異なる部分であり、あるいはこれも細面であることと関わるかもしれない。

以上ように肥痩両方の描写があるのは、単に痩せすぎでも太りすぎでもないことが美人の条件なのだとも考えられるが、痩せた方の要素はこの時代になって初めて加わったということができる。このことは、画像資料等からうかがえる、唐代に豊満な女性が美しいとされていたことと関係しているのではないだろうか。つまり、豊満

な女性が好まれたため、以前ではあまり醜いとされなかった痩せすぎという項目が、醜女の条件に加わったと思われるのである。

体型に関する表現で、唐代になって出現したものに、17の「肩侵鬢」といういかり肩の表現がある。前代の10の「踽僂」や同時代の18の「崇崎蹋蹐如龜鱉」などの表現にもいかり肩の要素を含むのかもしれないが、はっきりと肩のみに用いたものはこれのみのようだ。この表現の場合は、前の時代には醜とされなかったというより、醜貌表現が工夫されて細部に及んだということであろう。[43]

次に、顔の各部分の表現としては、まず眉について19に「眉白」という表現が加わっている。これは老婆であるからであろう。目については、前代ではくぼんでいることが表現されるのみであったが、くぼみに関する表現はなく、18では「一雙眼子似木槌梨」と、意味はよく分からないがその形について言及され、19では「眼如珠盞」・「眼裏睛如火」と、その色について言及されている。記述がなくなったからといって、くぼんでいるのが美人ということになった訳ではないであろうが、形の良さや色について意識されるようになったことを表しているのかもしれない。

次に口と唇・歯について見てみよう。口については前の時代では突き出た口が描写されていたが、継承された表現はないようだ。唐代では、21に「口大而甗錡」と大きな口が描写されており、17にいう「長嘴」というのも、大きな口をいうかと思われる。口が大きいということは、唐以前の文学作品の中には見えないが、先に引いた『医心方』に引く『玉房祕訣』には見えていたので、以前から性医学の方では重視されていたが、唐代になって一般にも小さな口が新たに美人の条件として加わったといえるかもしれない。

唇については、前の時代に歯が見える唇が描写されており、20にはそれに連なると思われる「藏頭出齒」の表現もあるが、この時代ではかなりはっきりと別の角度からの描写が定着しており、18では「上脣半斤有餘」、20では「惡努脣肛之觜」と、はれぼったい唇が描写され、19では「口青」、20では「塗嫩椹兮爲脣」と、色の悪い唇が描写されている。色については、古くから「朱唇」のことばがあるように、赤い唇が美人の条件であったが、[44]薄い唇の方は、当時新たに美人の条件に加えられたのかもしれない。

歯については、前代では歯並びのみが取り挙げられていたが、19に「齒黑」と、その色が描写されている。[45]美人の白い歯を表す「皓齒」は古くから用いられることばであり、唐代に入って歯の白さが問題になるようになった訳ではなく、表現の幅が広がった例といえるだろう。

鼻について、鼻筋に関する表現は前項で挙げたが、18で鼻の穴が大きいことが「鼻孔竹筒渾小」と詠じられ、20では鼻水が出ていることが「鼻頭足津」と描写されている。鼻に関する描写も詳しくなってきているといえよ

う。

最後に、本来であれば3「継承されなかった表現」として独立した一項を立てるべきであろうが、継承されなかったものは一つのみのようなので、ここで挙げることにする。それは耳に関する表現である。耳については、前代の文献にはゆがんだ耳と大きな耳の描写が見えていたが、唐代の文献の中には見えない。女性が髪を結うことを原則とした当時の中国においては、顔の他の部位と同様、耳も目立つ存在だったはずである。いずれもかなりの長文で容貌を描写した文献であったが、それに見えないということは、あるいは女性の耳に対して何か意識の変化が起こったことを反映しているのかもしれない。ただ、この点については別に詳しい調査が必要と思われるので、今後の課題としたい。

以上、唐代の醜女描写を前代のものと比較して、継承された表現と唐代になって変化・出現した表現を挙げてみた。簡単にまとめると、黒くてなめらかな髪の毛やほどよい背丈、色が白くてきめ細かい肌などの基本的な部分にはあまり変化がないが、痩せ過ぎや口の大きさ、唇の厚ぼったさなどが問題にされるようになったといえようか。他の資料との比較検討が必要だが、これらの変化は、唐代において、美人の条件に豊満で唇が薄くおちょぼ口であるという条件が加わったことを反映している可能性が指摘できよう。

おわりに

以上、本稿では、唐代にいたる醜女文学の流れについて考察し、唐詩に醜女が描かれなかった理由について卑見を述べ、さらに、醜女の容貌の描写から当時の美人の条件を探ることを試みた。

醜女描写に関しては、当然のことながら美女の描写と関連を考える必要があり、出土資料や画像資料との詳細な比較も必要であろう。また宋代以後の状況も気になるところではあるが、[46] これらは全て今後の課題としたい。また、二兎を追ったため、冗漫な上に論旨も曖昧になり、結局一兎をも得られなかったのではないかと懸念される。さらに、主に筆者の専門外の資料を扱ったため、誤読や調査不足の点も多々あると思う。諸賢のご教示ご批正がいただければ幸甚である。

注

(1) 管見の及んだ範囲では、中国文学における醜女や醜女文献に関する論文には、次のようなものがある（以下、注では原則として敬称を省略させていただく）。

・銭鍾書『管錐編』第三冊（全上古三代晋漢三国六朝文部分）六九「全後漢文巻九三」（中華書局、一九七九年）

・王継如「『醜女縁起』校釈補正」（『禅籍俗語言研究』第二期、一九九五年）

・楊青「『醜女縁起』変文及其仏経原型」（『西北師大学報（社

会科学版)』第三三巻第六期、一九九六年)
・伏俊璉「敦煌本『醜婦賦』与醜婦文学」(『敦煌研究』、二〇〇一年第二期〔総第六八期〕以下、伏氏第一論文と称する)
・同「漢魏六朝的詼諧詠物俗賦」(『西北師大学報(社会科学版)』二〇〇三年第五期。以下、伏氏第二論文と称する)
・胡立華・楊国学「敦煌文献中的俗賦研究」(『社会科学戦綫』、二〇〇二年第五期)
・李剛果「古代四大醜女」(『語文知識』、二〇〇三年第一〇期)
・劉石「中国古代文史中的容貌描写」(『文芸研究』二〇〇五年第七期)
・宇佐美文理「中国芸術論における『醜』の問題:序説」(曾布川寛編『中国美術の図像学』所収、京都大学人文科学研究所、二〇〇六年)
・福井佳夫「卞彬の遊戯文学」(『六朝の遊戯文学』所収、汲古書院、二〇〇七年)
なお、張競『美女とは何か—日中美人の文化史』(晶文社、二〇〇一年)においても、醜女の系譜について簡潔にまとめられている(頁八三〜七)。ただし、本稿でいえば第一節に収める歴史上の醜女の記述に基づき、醜女礼讃という視点から考察されたもので、本稿の中心となる文学作品中の醜女については触れられていない。

(2) ここでは唐詩に限らず、中国文学における女性美に関する先行研究の主なものを挙げておくことにする。なお、注(1)前掲の張競氏の書および劉石氏の文献においても、女性美について論じられている。
・村松暎「中国文学に現れた女性像について」(『芸文研究』一九、一九六五年)
・石川忠久編『中国文学の女性像』(汲古書院、一九八二年)
・康正果『風騒与艶情—中国古典詩詞的女性研究』(河南人民出版社、一九八八年)
・毛慶「論宋玉辞賦中的女性美及其創作心態」(『山西師大学報(社会科学)』一九九二年第三期)
・尚民傑「唐代婦女的芸術形象」(『文博』一九九二年第六期)
・陳宏碩「論古典詩賦中的女性形体描写」(『江漢論壇』一九九五年第一〇期)
・田中和夫「中国文学における女性美の表現をめぐって」(『キリスト教文化研究所研究年報 民俗と宗教』第二八号、宮城学院女子大学、一九九四年)
この他、李白の描く女性像といった、個々の文学者に関する論文もはなはだ多いが、ここでは割愛する。

(3) 唐詩に描かれた女性美に関する拙論には次のようなものがある。
・「胸前の雪—白詩における女性美表現管窺—」(『白居易研究年報』第五号、勉誠出版、二〇〇四年)
・「嫁と姑—中唐詩を中心に—」(『中国文史論叢』第三号、二〇〇七年)
前者は女性のバストの美に関する表現を扱ったもの。後者は嫁と姑の関係が描かれた詩を扱ったもので、唐詩においては嫁の美を描くために嫁姑関係が用いられることを論じた。

（4）注（1）前掲書第四章において、美女を描写する同じような表現が繰り返し再生産されることについて詳しく考察されている。

（5）ただ、この点に関してはいくつか問題がある。一つは、美女と同じように醜女の描写も画一的な表現が再生産されている可能性があることである。もう一つは、後に見るように、醜女の描写が諧謔性を追い求めるあまりに、ひどく誇張されていて、美女の条件を知るのにはほとんど役に立たない可能性があることである。特に第二点については、慎重さが要求されよう。例えば醜女の目が大きいという描写があるからといって、当時目の小さい人が美人であったとは限らない。目が大きいのが美人という時代があったとしても、もし異常なまでに大きければ、醜女として描かれることになるだろうからである。平均顔の理論によれば、ある文化に属する人々の多数の顔を平均化していくと、美男美女ができあがるという。すなわち、極端な場合は醜と意識されるのであり、「登徒子好色賦」の「之に増すこと一分なれば則ち太だ長く、之に減ずること一分なれば則ち太だ短く、粉を著くれば則ち太だ白く、朱を施せば則ち太だ赤し（増之一分則太長、減之一分則太短、著粉則太白、施朱則太赤）」ではないが、「大きすぎず小さすぎず」というのがまさしく理想的といえるのである。以上のような問題点があるが、本稿がそれをクリアしているかどうかについては、後の描写の分析によって、読者諸賢にご判断いただくしかないであろう。

（6）醜女文学の流れについては、すでに伏俊璉氏・福井佳夫氏に注（1）前掲の卓論があるが、伏氏第一論文は明清の作品まで広く紹介してあるものの、文学史的な流れが明確でなく、醜女の範囲を非常に広く考える点にもやや不満が残る。伏氏第二論文および福井氏論文は、六朝の遊戯的な賦の中での流れを位置づける材料の一部として扱われており、醜女に限定されず、また唐代には及んでいない。本稿では、主に両氏を中心とした先行文献に導かれながら、改めて筆者なりに醜女文学の流れをとらえ直してみたい。

（7）この文献には醜女に関する描写がやや多いので、主に山崎純一氏『列女傳』（明治書院、新編漢文選、一九九六～九七）の考証によりながら、それぞれの具体的な意味を注記しておこう。

〔臼頭〕は頭の頂点がくぼんで平らになっていることをいうのであろう。「凹頭」に作るテキストもある。〔深目〕はくぼんだ目。〔長壯〕背が高くて図体が大きいことという。「長指」に作るテキストもあるようだが、下の「大節」との関係からすると体格の表現と考えた方がよいようである。〔大節〕骨格がいかついことをいう。〔卬鼻〕上を向いた鼻。〔結喉〕腫れ物ができた喉という説と喉ぼとけが突き出ていることをいうとする説とがあるようだ。前者であれば病気ということになるが、いずれにせよ突起のある喉ということになろうか。なお、『医心方』房内篇「惡女」の条に引く『玉房祕訣』で、「惡女」すなわち醜女の相を挙げる中にも「結喉」がある。〔折腰〕折れ曲がった腰。〔出胸〕は胸骨が突出することという。いわゆる鳩胸をいうのであろう。

（8）この醜女描写にも簡単に語釈を施しておこう。

〔黄頭〕は赤毛、色の薄い毛のことであろう。『医心方』房内篇「惡女」の条に引く『玉房祕訣』でも「黄髪」が挙げられている。〔黒色〕色黒。

（9）注（1）前掲李剛果氏論文。以下、本稿では、煩雑さを避けるため、資料に付けた通し番号によって称することとしたい。

なお、四大醜女中でも特に有名なのは、2の鍾離春であろう。元曲「鍾離春智勇定斉雑劇」・京劇「湘江会」などの戯曲になっているようで、長年にわたって親しまれた人物といえ、二〇〇一年にはサミー・チェン（鄭秀文）主演で映画「鍾無艶」（無塩が変化して鍾無艶とも称される）が作られている。また、「丑似无盐（醜似無塩）」は決まり文句にもなっている。5の孟光も有名で、「挙案斉眉」の故事が戯曲となっているようで、また夫婦が互いに尊敬し合う意の成語ともなっているが、ただ、後世に描かれる孟光像にあっては、彼女が醜女であったことはあまり重視されていないように思われる。

（10）もちろん実際の人間の美醜は個人によってさまざまであり、婦容の徳についても、張競氏も注（1）前掲書で触れているように（八六～七頁）、その人なりにきちんと化粧をし身づくろいをするという意味で解釈されてきた。しかしそれはいわば実際の人物に対して運用するためであって、7に引いた許允のことばがいみじくも露呈しているように、また、5のきちんと化粧した孟光に対する梁鴻の態度が反面から証明しているように、やはり醜女は一般には婦徳を欠いたものと考えられていたと思われる。『世説新語』惑溺に記される荀粲の「婦人は徳は稱するに足らず、當に色を以て主と爲すべし（婦人德不足稱、當以色爲主）」（＝婦人にとって徳など問題ではない。容色こそが大事なのだ）ということばは、恐らくあまり大声ではいえない「本音」なのであり、このことばに付された裴楷の「一時の興で述べたまでで、正しい道にかなうことばではないから、後の世の人はこれにくらまされないでほしい」ということばは、「建前」の側からの注意喚起なのであろう。

なお、婦人が備えるべき四つの徳目のうち、残りの三つは婦徳＝貞順、婦言＝辞令、婦功＝糸麻とされている。

（11）特に妬婦については、醜女と異なり、文学の中でも『毛詩』以来ずっと言及され続けてきた存在であり、別に考察すべきであろう。なお、妬婦については林香奈氏に「『妬婦』考」・「『妬婦』考・補説―恐妻家の記録―」（『言語文化論叢』五・六、二〇〇一年・二〇〇二年）の一連の論考がある。

（12）注（1）前掲福井氏論文では、これらの文献の記述も、「登徒子好色賦」が諷刺を装っているのと同様の姿勢がつらぬかれているものと見なして、醜女を描く代わりに内面のすぐれた徳をも描くことにより倫理的な読み物となりえているとされるが、醜貌に対する嘲笑がないという点で「登徒子好色賦」などとは区別すべきものではないだろうか。

（13）文章全体が六二八字であるのに対して、上にも引いた醜女描写は三一字しかなく、わずか二十分の一である。なお、これらの文献の中で、2の醜女描写が最も多い理由は、『列

女傳』に三人並ぶ醜女のうちの最初の人物であるからというばかりでなく、3・4が礼節をわきまえ諫言をよくするといった一般的な徳があるのみの人物であるのに対し、鍾離春の場合は、突然姿を消すという超自然的な力を持つ人物であることと関係しているのではないだろうか。見た者を石に変えるギリシャ神話のメドゥーサや不老長生をもたらす『古事記』の石長比売（イハナガヒメ）の例からもうかがえるように、外見の異様な人物は（男女を問わず）異能を持つことが多い。なお古代の醜女の持った力については、大塚ひかり「文学は美醜をどう描いてきたか」（『男女という制度』所収、『二一世紀文学の創造』七、岩波書店、二〇〇一年）および『太古、ブスは女神だった』（マガジンハウス、二〇〇一年。のち『ブス論』と改題、ちくま文庫、二〇〇五年）に詳しい。

(14) 劉石氏注（1）前掲論文では、男性をも含めた醜人の条件として、色の黒いことと背が低いことの二つが挙げられている。

(15) 前注でも述べたように、劉石氏は、醜人の条件として、色の黒いことと背が低いことの二つを挙げるが、これを見ると、少なくとも女性の場合は、高ければ高いほどよいというわけではなさそうだ。

(16) 『荘子』における美醜に関わる記述としては、この寓話のほか、美醜は相対的なもので、人間から見れば絶世の美女でも、鳥や魚が見ると逃げてしまうという齊物論の比喩や、美女と醜女の二人の妾がいる男が、自分を美しいと思っている美女をさげすみ、自分を醜いと思っている醜女を貴んだという山木の寓話も名高い。

(17) 以下、醜貌描写に簡単に注釈を施しておく。

〔蓬頭〕李善は『荘子』説剣に戦う人物を形容して「蓬頭突鬢」というのを引く。蓬は飛蓬、根無し草。『毛詩』衛風「伯兮」の「伯の東してより、首　飛蓬の如し（自伯之東、首如飛蓬）」の毛傳に「婦人は夫在らざれば、容飾する無し（婦人夫不在、無容飾）」というように、蓬のような頭というのは、男女を問わず、乱れてぼさぼさの髪をいう。なお『医心方』房内篇「悪女」の条に引く『玉房祕訣』でも「蓬頭」が挙げられている。〔攣耳〕五臣は注せず、李善は『爾雅』釋詁に「病也」というのを引くのみであるが（『爾雅』では「攣」を「臠」に作る）、「攣」には曲がる・ひきつるの意味があるから、曲がった耳・つぶれた耳をいうのであろう。〔齞脣〕「齞」について李善注は「口を張りて齒を見（あらは）すなり（張口見齒也）」という『説文』の記述を引き、五臣（劉良）注は「語りて齒を露すを謂ふなり（謂語而露齒也）」と注している。口が閉じず歯が見えることを「齞脣」というのであろう。〔歴齒〕「歴」は李善・五臣注ともに「疎」と解しており、隙間のあいた歯・まばらな歯をいう。〔旁行〕これは容貌というより行動の表現。李善は注していないが、五臣（李周翰）注に「行くこと正しからざるなり（行不正也）」といっており、「踽偻」からくる不自然な歩き方をいうようだ。〔踽偻〕李善注に「曲がれる貌なり（曲貌）」という『廣雅』の記述を引き、五臣（李周翰）注に「身の曲がれるなり（身曲也）」というように、腰が曲がった様子をいうようである。〔疥〕

ひぜん。寄生虫によっておこる伝染性の皮膚病。

(18) この点については注（1）前掲福井氏論文に詳しい。

(19) 嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』は出典を『初學記』と『太平御覽』としながら、校語の中で『藝文類聚』による異同を記す。『藝文類聚』に収められているとすれば、この作品の成立の下限が『初學記』よりもやや前になるのだが、実際は『藝文類聚』には収められていないようである。また、筆者の調査した限りでは、嚴可均の記した異文に作るテキストはなく、この異同が何に依拠したのかもよく分からない。

(20) 『初學記』「醜人」の条は、晋の劉謐之の「龐郎賦」～朱彦時の「黒兒賦」～劉思眞のこの賦、という順になっているが、嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』は、この賦を朱彦時の「黒兒賦」とともに「先唐文」の部分に収め、朱・劉について「爵里未詳」とした上で、朱彦時について「初學記を案ずるに、晋の劉謐之の後、劉思眞の前に編む。疑ふらくは是れ晋人ならん（案初學記、編于晋劉謐之後、劉思眞前。疑是晋人）」といい、劉思眞について「案ずるに、梁の劉之遴は、字は思貞なるも、未だ醜婦有るを聞かず。此れ思眞に作れば、即ち之遴なるに非ず（案、梁劉之遴、字思貞、未聞有醜婦。此作思眞、非即之遴）」と注している。これに対し、陳尚君『全唐詩續拾』巻六〇「先宋詩下」（『全唐詩補編』所収、中華書局、一九九二年）では、嚴可均が「先唐文」に入れたのには確たる証拠があるわけではないとし、王重民「敦煌変文研究」（『中華文史論叢』一九八一年第二輯）が朱彦時と劉思眞の作を初唐の作とするのについて、「或いは其の實を得るならん（或得其實）」と述べて『全唐詩』の補遺作品として収録する。ただし、王重民の当該論文にも確たる証拠が挙げられている訳ではない。注（1）前掲伏氏第二論文では、『初學記』で朱彦時の後に収めるので晋人かもしれないし、梁の劉之遴のことかもしれないと記している。注（1）前掲福井氏論文は明確に晋人と記しているが、論拠は不明である。『初學記』では劉思眞の「醜婦賦」の後に宋玉の「登徒子好色賦」が収められており（『太平御覽』も同様で、『楚辭』の後に劉思眞～宋玉の順、男性を描く朱彦時の作は収めない。『錦繡萬花谷』は『楚辭』～宋玉～朱彦時～劉思眞の順になっている）、『初學記』のこの部分の配列が時代順であるかどうかについても、疑問を差し挟むことは不可能ではなかろう。

なお、『古今事文類聚』後集一二は「劉思亨」に作るが、他に「劉思亨」に作るものはなく、また「劉思亨」なる人物も不明であり、恐らく誤りであると思われる。

(21) 現代語訳は筆者の施したものである。以下、『初學記』をテキストとして、容貌に関する表現を中心に簡単な注釈を施しておく。

〔獨何咎〕「咎」、『初學記』は「吝」に作るが、韻に合わない。『錦繡萬花谷』等が「咎」に作るのに従う。〔姜任〕「姜」は周の文王の祖母で古公亶父の妃の大姜をいい、「任」は文王の母で王季の妃の大任をいう。古く『毛詩』大雅「思齊」等からその徳が称えられている女性である。〔嫫母〕前節で触れた、伝説的醜女。〔鹿頭〕シカのような頭。どのような

頭なのかよく分からないが、下の「頭如研米槌」の表現や、2の鍾離春が「臼頭」と表現されていたことを考え合わせれば、シカの頭部のように、額から頭頂部にかけてほぼ平らなことをいうのであろうか。〔獼猴面〕サルのような顔。サルの顔のどのような面を取り挙げた比喩なのかよく分からないが、『藝文類聚』獼猴の部に引く後漢の王延壽の「王孫賦」に、サルの形態の描写を行うのに、最初に「顔狀は老公に類し、軀體は小兒に似る（顔狀類乎老公、軀體似乎小兒）」と述べていることを考え合わせれば、サルの顔には老人のようにしわが多いことから、しわだらけの顔をいうか。あるいは現代日本でもサルの顔＝赤いというイメージがあるように、サルのような赤ら顔を指しているのであろうか。〔椎額〕木づちのようなひたい。これもよく分からないが、木づちの頭部は出っ張っているから、出っ張っているということであろうか。前の句の「獼猴面」と下のサルのような「出口」という表現との関わりでいえば、サルの顔は額の辺りが出っ張って目がくぼんでいるものである。または、サルは額が狭く眉の辺りから毛が生えているので、木槌の頭ほどの幅しかない狭い額をいうのかもしれない。〔出口〕口が突き出ていることをいうのであろう。なお、サルの頭部は一般に口が突き出ており、「獼猴面」とも関わる表現かもしれない。また、シカの口も突き出た鼻の下にあり、「鹿頭」と関わる表現という可能性もある。〔折頞〕鼻筋が低いこと。揚雄「解嘲」（『文選』巻四五）に出ることば。「頞」は鼻筋・鼻柱。「解嘲」の李善注は「頞は、鼻莖なり（頞、鼻莖也）」という『説文解字』の記述を引くのみで、「折」の字の方には特に注していないので、「折頞」で鼻筋が曲がっていることと解釈しているようだが、五臣注（劉良）は「折頞、鼻の莖隴無きを謂ふなり（折頞、謂無鼻莖隴也）」と、「折頞」の二字で鼻柱がないことと注しており、すなわち鼻が低いことをいうと解釈しているようである。ここでは下との関係から、鼻が低い方で解釈した。〔齵樓鼻〕「齵」はえくぼ。顔に貼るアクセサリーの一種をもさすが、化粧のことは後で出るため、ここはえくぼと解釈してよいだろう。「樓鼻」、戦国時代の人名の例もあるが、ここでは意味が通じないので、「樓」を「高い」の意味で解釈した。顔の中でくぼんでいるはずのえくぼの部分さえ、鼻よりも高いというのであろう。〔顒如臼〕「顒（あう）」は目がくぼんだ形容。〔膚如老桑皮〕肌は桑の老木の樹皮のようである。桑の木の幹は表面がごつごつして灰色がかっているので、皮膚がなめらかでないことをいうとともに、色が濃いことも表していよう。〔耳如側兩手〕「側兩手」は用例がないことばだが、「そばの二つの手」ということであろう。耳についての表現なので、顔のそばに両手を広げているような大きな耳をいうと解釈した。〔頭如研米槌〕後の句との対からすると「米槌」が精米するための棒で、「研」はそれが使い古してちびていることをいうか。〔髪如掘掃帚〕「掃帚」は箒。「掘」は禿げた筆を「掘筆」というように、使い古して禿げた箒のことをいうのであろう。〔惡觀醜儀容〕「儀容」はりっぱな姿、礼にかなった様子をいうことば。皮肉で用いたことばであろうか。「惡觀」は見られることを憎む、の意で解釈

したが、醜い外見の意の可能性もあるかもしれない。〔鋪首〕門の取っ手とする環をくわえる、獣などの形につくる金具。獣じみていて表情を変えないことの比喩であろう。〔刻畫〕絵を描くことと彫刻すること、絵画と彫刻。飾る意。ここでは化粧のことをいうのであろう。〔妝頰〕化粧した頰の意か。〔如狗舐〕犬が舐めたように、一部だけはげている（または塗っている）というのであろう。〔朱脣〕赤い唇。ここでは化粧の表現なので、口紅を付けた唇のことをいうであろう。〔如踏血〕「踏血」に何か意味があれば次の句とよく対になるが、よく分からない。〔如鼠負〕「鼠負」は虫の名、わらじ虫。「鼠婦」ともいう。眉の形がわらじ虫のようだというのであろう。〔傅粉〕おしろいをつけること。〔堆頤下〕「頤下」はあごの下。そこにおしろいが「堆」＝高く積もっているというのであろう。〔領如鹽豉囊〕「鹽豉」は味噌。味噌袋のようなえりというのは、ひどく汚れていることをいうか。〔袖如常拭釜〕袖はしょっちゅう釜を拭いているようだ。やはり汚れをいうのであろう。〔履中如和泥〕履き物の中が泥を混ぜたようだというのは、そのような臭いがするということか。〔爪甲長有垢〕爪が長くて、その延びた爪の中に垢がたまっているというのであろう。〔脚皺可容箸〕「皺」はあかぎれ、ひびわれ。足にできているので脚皺というのであろう。それにはしが入るほどだというのは、あかぎれのひどさを誇張して表現したものであろう。

(22)『古今事文類聚』後集一二は古詩の部分に「醜婦詩」と題して収め、注（20）前掲陳尚君『全唐詩續拾』も詩として収録する。

(23) この他、『北堂書鈔』一八五地部「穴」の条に繁欽の「明□賦」の「脣實範綠、眼惟雙穴、雖蜂膺眉鬢、梓」という断片が収められ、注（1）前掲錢鍾書氏はこれを「胡女賦」の間違いであり、異民族女性の醜貌を描いた作とし、伏氏第一論文もそれを支持しているが、以下のいくつかの理由により、ここでは醜女の描写である可能性を指摘するに留めておく。まず、「穴」の条にあって何かの比喩という可能性も皆無ではないこと、第二に容貌の描写であるとしても、女性とは限定しがたいこと、第三に、胡女の描写であるとしたら、他の文献における中国の女性の描写と同列に論じられない可能性があること、第四に「醜」と意識されていたかどうかが明確ではないこと、である。

(24) 注（1）前掲福井氏論文では、宋玉では嘲笑の内容ながら諷刺の意図を持つと取り繕う必要があったのが、劉思眞ではその必要がなくなって嘲笑を前面に押し出すことができるようになったという流れがあるとしておられ、それは六朝の他の遊戯的な賦も同様であると指摘されている。

(25) ただし『初學記』は類書であるから節録の可能性もあり、実際注（20）前掲王重民氏論文では、節録の作品ととらえている。

(26)『初學記』という書名はまさにそれを示したものであるといえよう。なお、『初學記』については中尾一成氏「『初學記』試論」（『関西大学中国文学会紀要』第二一号、二〇〇〇年）に詳しい。

(27) 注（1）前掲書五三～五六頁。
(28) 注（1）前掲論文。また注（14）（15）参照。
(29) 「又疥且痔」も10のみに見られる表現だが、いずれも病気であるから省略した。ただ、「痔」はともかく「疥」（皮膚病）の方からは、肌に美醜のポイントがあることがうかがえる。
(30) 銭鍾書氏と伏氏第一論文は、それぞれ『雲溪友議』に引かれる他の詩をも引用しているが、銭氏の引く陸巖夢（銭氏は陸巖とする）の詩は、異民族の女性に関する詩を他の文章の解釈のために引くもので、中国女性の容貌と異なる観点で描かれている可能性があり、伏氏が引く崔涯の詩は、妓女を嘲笑したものではあるが、醜貌を描いているとはいいがたいものなので、ここではこの作のみを扱うことにする。
(31) 以下、醜貌描写を中心に、簡単に注釈を施しておく。〔只首〕二字で「ただ」「ひたすら」の意。「只手」「只守」とも表記される。この語の解釈は、衣川賢次氏のご教示による。ここに記して深く感謝の意を表したい。〔瘦拳〕痩せたこぶし。〔抛令〕令は酒令のことであろう。じゃんけんのような、拳を使った酒令と思われる。「抛」というのは、その拳を出すということであろう。〔長嘴〕長い口というのはよく分からないが、大きい口のことか。〔肩侵鬢〕肩が鬢の辺りまである。いわゆるいかり肩のことをいうのであろう。〔骨透皮〕皮膚を通して骨が見える。痩せて骨と皮ばかりであることをいう表現か。〔不須〕「有須」に作るテキストもある。こちらに従えば、「須」は「鬚」の意で解し、「ヒゲを生やして戸口に立たせれば」の意味となろう。
(32) 李白「上安州李長史書」に「徐邈緣醉而賞、魏王却以爲賢」というのは、禁酒令を破って酒を飲んでいた徐邈を魏文帝が認めたという故事（『三國志』魏書徐邈傳）に基づき、「無鹽因醜而獲、齊君待之逾厚」は第一節に引いた鍾離春の故事（2）に基づくもの。黄滔の「祭右省李常侍洵」の「隣家醜婦、競顰西子之眉」は、第二節に引いた顰みにならうの故事（9）に基づき、「洛下諸生、皆掩謝公之鼻」は、鼻の病気のために濁っていた謝安の歌声をまねようとして人々が鼻を押さえて歌ったという故事（『晉書』謝安傳）に基づいている。すなわち、これらの醜女表現はいずれも故事を用いた一般的な表現であり、醜女を描こうとするものではない。
(33)『朝野僉載』については、伏氏第一論文では阮嵩の妻の条を引いているが、嫉妬深い女性の話である。醜女文学の例としてはこちらの方がふさわしいであろう。以下、『朝野僉載』と『投荒雜録』の醜女描写に、簡単に注釈を施しておく。〔蓬頭〕ぼさぼさの髪。すでに「登徒子好色賦」等に見えた。〔垢面〕あかだらけの顔。「蓬頭」と同じく女性の描写のみに用いるわけではなく、『漢書』王莽傳上に王莽の様子を描写して「亂首垢面」といい、また『顔氏家訓』風操や『魏書』回族叔軌傳に、いずれも男性の様子を描写して、ここと同じく「蓬頭垢面」と見えるなど、古くから用いられることばである。〔傴肩〕このことばに関しては用例が見当たらず、意味はよく分からないが、『投荒雜録』の「傴僂」と同じく、「登徒子好色賦」の「踽僂」の語から発想されたもので、下の「腹」と対にするために「肩」の字を加えたものであろう。いかり

肩のことをいうか。〔皤腹〕ふくらんだ腹。太鼓腹。「皤腹」でまとまる古い例はないが、古く『春秋』宣公二年の『左傳』に引かれる歌に「睅たる其目、皤たる其の腹（睅其目、皤其腹）」という表現がある。宋で城を築く者たちが巡視した華元をそしった歌という。「皤腹」の形では、唐代の劉知幾の『史通』や杜牧の詩に例が見える。〔寢惡〕「寢」は「寢容」「寢陋」などの語があるように、醜いこと、風采があがらないこと。「寢惡」で「醜惡」というような意味であろう。〔傴僂〕は「登徒子好色賦」の「踽僂」に同じ。

このようにみれば、これらの醜女描写の多くは、女性の描写に限らず古くからよく用いられる表現であり、それを醜女表現に用いたものといえる。これらの醜女描写が、醜女の様子を描写するために用いたものであって、嘲笑しようとする意図で用いられたのではないという点だけでなく、伝統的な表現を踏襲しているという点においても、後にみる変文等の醜女描写と大きく趣を異にしているといえるだろう。

なお、『投荒雜錄』の例については、富永一登氏よりご教示いただいた。ここに記して深謝申し上げたい。

(34) 北魏の吉迦夜等訳とされる『雜寶藏經』巻二の「波斯匿王醜女賴提緣」には、醜貌の描写は全くないようだ。呉の支謙訳とされる『撰集百喩經』巻八比丘尼品第八「波斯匿王醜女緣」には、「身體は麤澁（そじゅう）にして、猶ほ蛇の皮の如く、頭髮は麤強にして、猶ほ馬の尾の如し（身體麤澁、猶如蛇皮、頭髮麤強、猶如馬尾）」と描写され、北魏の慧覺等訳『賢愚經』巻二「波斯匿王女金剛品第八」には「肌體は麤澁にして、猶ほ駝の皮の如く、頭髮は麤強にして、猶ほ馬の尾の如し（肌體麤澁、猶如駝皮、頭髮麤強、猶如馬尾）」と描写されている（テキストはいずれも『大正新脩大藏經』本による）。「蛇」と「駝」の違いは、どちらかが音による誤りであろうか。

なお、この金剛醜女の故事については、注（1）前掲楊青氏論文および川口久雄「醜女の変身―敦煌本金剛醜女変・廬山遠公話と我が句に太子伝・役行者説話―」（『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』所収、大東文化学園、一九八四年）に詳しい。

(35) 本文は項楚『敦煌変文選注』（巴蜀書社、一九八九年、以下項注と称する）および黄征・張涌泉『敦煌変文校注』（中華書局、一九九七年、以下黄注と称する。なお、本書は一般に用いられる「醜女緣起」の題ではなく、「金剛醜女因緣」の題を用いる）によった。ワープロの都合上、通行の字体を用いたものもある。口語訳については、当時の俗語のニュアンス等について、筆者の乏しい知識に基づく拙い訳よりもはるかに正確であろうと考え、ルビも含めて入矢義高『仏教文学集』（平凡社中国古典文学大系六〇、一九七五年、以下入矢注と称する）の訳をそのまま用いさせていただいた。容貌の具体的描写については、入矢注とは異なる解釈をしているものもあるが、それについては、以下の注釈において記すことにする。以下、容貌の描写に関わる主な部分に簡単な注釈を施すこととするが、その際には注（1）前掲王継如「『醜女緣起』校釈補正」（以下王注と称する）をも参照した。

〔崇崎〕隆起する形容。〔跼蹐〕曲がり縮こまる形容。〔渾身

又似野豬皮〕全身がイノシシの皮のようだというのは、体毛が多いこととともに、色白でないことを表していよう。〔可憎皃〕項注・黄注が「貌」の異体字「皃」であるとするのに従ったが、王注は「見」字に作るテキストに従い、「憎」字は「曾」であり「可曾見」で見たこともないの意であるとする。〔黑韌皮〕項注「韌」字（柔らかで強い皮革の意）とするが、王注は「軾」（火を吹くための革袋の意）とし、黄注は「靰」（革の意）の字とする。いずれにせよ、肌の色の黒いことを比喩したものであることは確かであろう。〔跟頭〕逆立ちやとんぼ返りを指すことばのようだが、足について描写したここでの意味はよく分からない。あるいは頭は接尾辞で跟＝かかとを指すか。〔皴又僻〕項注「皴」字として「皴僻」は「皴劈」に同じくひびわれ・あかぎれの意とする。こちらに従い、肌の様子をいう表現と解釈した。王注は、項説とともに「僻」を「躃」（躄に同じ）とする説を紹介する。黄注は「皴」を「朘」（縮まるの意）の俗写とし、「僻」を「躃」の字で解する。〔驢尾〕項注に従ったが、黄注は「總樹」「宗樹」に作るテキストに従い、「棕樹」すなわちシュロの木の意とする。ただ、もとになった経典のうち、『撰集百喩經』と『賢愚經』には「頭髮は麤強にして、猶ほ馬の尾の如し（頭髮麤強、猶如馬尾）」の表現があった。これに基づいて馬を驢馬に変えたのであるとすれば、「驢尾」に作るテキストの方が本来の形に近いかもしれない。どちらであっても、ごわごわの乱れた髪をいうことは間違いあるまい。〔十指纖纖如露柱〕「纖纖」はほっそりとした形容。入矢注、「露柱のごとく」というからにはずんぐりと太いはずなので、「十指纖纖」が常套句であるためすっかりそのまま使ってしまったと解する。「露柱」については、禅の語録に頻見し、法堂か僧堂の前庭に立ててある石柱らしいが、具体的には不明とする。項注は功績のある家の門の左右に建てる柱（閥閲）のことを指すとする。黄注もこの説を引いて、「纖纖」は反語であると解する。王注は「纖纖」は「鑯鑯」（鋭い・尖っている）であるとし、「露柱」については、禅の語録の用例から、堂殿廊廡中の柱であり、灯籠を掛けることができるものであるとし、灯籠を掛けるための釘が出たような、粗末でトゲのある柱と解する。〔木槌梨〕項注が「木堆梨」の原文の「堆」が「椎」の誤りで「槌」に同じとするのに従った。「木槌梨」は一方の頭がやや大きくて梨の形をした槌であるとする。入矢注は「木堆梨」と「禾埵離」の二通りの原文があるとし、結局どういうものなのかは不明であるとする。黄注は項注と同じく「木槌梨」とした上で、木槌の形をした梨のこととする。王注、「槌離」「堆梨」等と記されるのは「槌」を「捶槌」と称するのが互倒して音の近い文字が当てられたものであり、すなわち槌の意であって、梨の形には関係ないとする。木槌の形であるにせよ、梨の形であるにせよ、具体的にどのような形の目を表現しているかはよく分からない。〔上脣半斤有餘〕上唇が半斤あまりの重さというのは、上唇の厚さを表現したものであろう。〔鼻孔竹筒渾小〕鼻の穴はどんな竹の筒も小さいと思わせる。鼻の穴が大きいことを表現したものであろう。〔趙士襪脚〕項注、「趙十」に作るテキストもあ

り、当時の曲名の「別趙十」「哭趙十」などに見える人物とする説もあるが、『荘子』秋水の「邯鄲の歩み」の故事を用いているとして、「趙士」に作るテキストに従う。入矢注は未詳としつつ、文脈から不風流の代表的スタイルをいうとし、趙は古来美女の産地であるが、男の方は不粋で野暮なものが多く、特に長脚絆または靴下を着けて歩く格好がぶざまだったのであろうとする。王注は押韻と字形、「襪」の字とのつながりから、「脚」ではなく「袜」（靴や靴下の上部）の文字とし、靴下と関わりのない「邯鄲の歩み」の故事を用いたのではないとして、「趙士」あるいは「趙十」の基づく故事は不明だが、男性であることは確かだから、「趙士（十）襪袜」で、男の靴下（あるいは靴）のように太い足をいうと解釈する。黄注は、「趙十」に従い曲名に見える人物を指すとする説と、「趙士」に従い趙の武人を指すとする説を紹介して、後者の方がやや勝っているとする。色々な説があるが、結局歩く姿の描写と考えた方が、前後のつながりとしてはよいようである。

(36) 本文・口語訳については18「醜女縁起」にならう。以下、醜女描写を中心に簡単な注を施しておく。

〔珠盞〕入矢注は「灯心皿（?）」と疑問符を添えているが、項注・黄注ともに、「珠」は「朱」であるとし、赤い皿とは大きくて赤い瞳を指したものという。項注はさらに、これは当時の凶悪な相であったとして、小説における赤い目を描写した例を引いている。〔火曹〕入矢注は訳にそのまま「火曹」の語を用いる。項注は「曹」は「槽」（焼け残りの焦げた木ぎれ）の意とし、黄注も同じく「槽」の字とし、木炭のように顔が黒くて長いことをいうとする。そうであれば、色黒の表現となる。〔額闊〕額が広い。〔頭尖〕頭が尖っている。〔胸高〕2の鍾離春の「出胸」と同じく、鳩胸のことをいうのであろう。〔鼻曲〕鼻が曲がっている。〔髪黄〕髪の毛の色が薄い。6の黄氏の描写にも「黄頭」の語が見えた。〔歯黒〕歯が黒い。本稿では取り扱わなかったが、『杜家立成雑書要略』でも「焦歯」＝焦げたような色の歯が描かれている。後の注(40)参照。〔眉白〕眉毛が白い。これは老婆ゆえの描写であろう。〔口青〕この「口」は唇のことであろう。唇が青く、色が悪い。〔面皺如皮裹髑髏〕顔のしわは髑髏を皮で包んだようだ。顔の肉付きが悪く、しわだらけであることをいうのであろう。〔筋頭餡子〕「筋」は「筋」に作るテキストもあるが、黄注が「筋」に作るのに従う。「筋」は「箸」に同じ。「餡子」は項注によれば、揚げ団子の類。〔身膽〕「膽」は身体が曲がっていること。〔老鴉〕「鴉」は「鴟」に同じ、トビ。〔穀鸛〕入矢注は「穀□の鳥」と下の字を空格とする。項注・黄注ともに鳥の名として用例を引くが、どのような鳥なのかについては、結局よく分からない。〔睛〕項注に従う。黄注は「清」字に作るテキストに従い、「清」は痩せている意味で、痩せて落ちくぼんだ目を表現したものとするが、対としては「睛」（瞳）の方がよいであろう。〔嬰似魁〕「嬰」はこぶ。「魁」は入矢注に「もののけ」のルビが施されているが、こぶのある姿ではなくこぶ自体の描写であろうから、項注・黄注に『國語』周語下の「魁陵」の注に「小さき阜を魁と曰ふ（小阜曰

魁)」というのを引いて、小さな岡に喩えていると解釈している方が穏当か。

(37) 本文は伏俊璉『敦煌賦校注』(甘粛人民出版社、一九九四年、以下伏注と称する)および張錫厚『敦煌賦彙』(江蘇古籍出版社、一九九六年、以下張注と称する)によった。現代語訳は主に伏氏に従いながら、筆者が施したものである。以下、醜貌描写を中心に、注釈を施すこととする。

〔畜眼已來醜數、則有兮一人〕伏注に「畜眼」は「蓄眼」と同じで眼中に映ることをいい、「醜數」は「醜輩」の意であるとするのに従う。なお張注は「畜眼已來、醜數則有兮一人」と句を切るが、伏注の句読に従った。〔幡飛蓬〕「幡」、「翻」の字に通じ、ひるがえす意味であるとする伏注に従う。「飛蓬」は風に飛ぶ根無し草。「蓬」は「登徒子好色賦」にも見えたように、乱れた髪の形容としてよく用いられる。〔塗嫩椹〕「嫩」の字、「嬾」に作るテキストもあるが、ひとまずこちらに従う。「椹」は本来「甚」に作るが、伏張両注が「椹」であるとするのに従う。桑の実。張注にいうするように、黒いものの象徴で、唇が黒いことを指すのであろう。伏注は「嫩椹」と呼ばれるものは赤いことについて考証しているが、あまり細かい穿鑿は必要ないのではないか。〔分利〕両注が「犀利」に同じとするのに従う。鋭い兵器の意から、鋭いことばの意となる。〔姤毒之精神〕「姤」は悪賢い意、「姤毒之精神」でずるくてあくどい心の意であろう。「精神」については、伏注は気力・活力と解するが、ここでは一般的な意味で解した。〔鼻頭足津〕「津」は本来「律」に作るが、「律」は韻に合わないことから、両注「津」とする。「津」は鼻水をいう。〔如能窮舌〕伏注は「如能」は「顯能」(能力をひけらかす)の意とするが、「ごとし」の意で解しても同じ方向になろう。「窮舌」は伏注に無駄話、くだらない話の意という。〔饞則〕「則」は本来「苑」に作るが、伏注に「則」字の誤りとするのに従う。〔愛斧憎薪〕本来「愛父增薪」に作るが、伏注が「愛斧憎薪」という当時の俗語の誤りであるとするのに従う。正確な意味は分からないが、本末転倒といったところか。〔碎皺〕細かな皺の意か。〔嚴平〕漢の嚴君平をいう。〔許負〕もと「負許」に作るが、両注が「許負」とするのに従う。漢の人。〔或人忽然而嘆曰〕この「曰」の内容は、感嘆の語気を含む「甚没擧止」まで等、もっと短く解することもできようが、後の部分に「尒」という二人称もあるので、ここでは韻の変わる部分までとして解した。〔前褰後跨〕伏注によれば、前の衣を掲げると、後ろが下がってつまづくことという。〔披掩〕伏注に、頭巾で頭を覆うことという。〔藏頭出齒〕本来「藏頭出唇」に作るが、韻が合わないので「齒」の誤りとする伏注に従う。〔以犢速兮爲行、以屈焠兮爲跪〕「犢速」、「屈焠」はともに未詳。伏注が前者は老牛のようにぶるぶる震える形容、後者は蝶つがいのように二つに折れる形容とするのにひとまず従う。〔五色鬼〕伏注、五色の配される東西南北中央の五方の鬼のこととする。〔三家村〕本来「三村家」に作るが、伏注が「三家村」に作るのに従う。三軒ほどしか家のないような小さな村のことであろう。〔咋咋鄒鄒〕伏注、大声で騒ぐこととする。〔聒里〕本来「括里」に作るが、伏

注が「聒」に作るのに従う。〔仡脂磨邏之面〕伏注は「仡」を「屹」に通じてそびえる意とし、「仡脂」は脂肪が高く盛り上がっていることを表現したものとする。「脂」を動詞「脂を塗る＝化粧をする」の意で解釈する可能性もあるが、化粧した様子は後に描かれるので、ひとまず伏注に従っておく。「磨邏」は「魔羅」に同じ、サンスクリット語Maraの訳語、仏教の修行を邪魔する悪鬼をいう。伏注はまた泥人形「魔合邏」のことである可能性をも指摘する。〔惡努脖肛之背〕「努」は現代中国語で用いられる、口を突き出す・尖らせるの意であろう。「脖肛」は腫れふくれる形容。〔撼戰〕挑発する意とする伏注に従う。〔打女而高聲怒氣〕この句の後に一句抜けているとされる。〔擺敷〕本来「罷故」に作るが、「罷」は「擺」の欠けたもの、「故」は「敷」の草書体を誤ったものとし、「擺敷」で花黄などを並べて貼る意とする伏注に従う。〔出行〕伏注、人より飛び抜けていることとする。〔十惡〕仏教における十の悪。すなわち殺生・偸盗・邪淫・妄語・綺語・両舌・悪口・貪欲・瞋恚・邪見。〔各自前得努力〕伏注、「前」字は「皆」の形誤である可能性を指摘するが、そのままでも解せるのではないだろうか。

(38) 本文は主に飯田吉郎氏『白行簡　大楽賦』（汲古書院、一九九五年、以下、飯田注と称する）の翻字によるが、同書に収める写真版および同書の付録となっている葉徳輝の『雙梅景闇叢書』本（以下、葉本と称する）に基づいて改めた部分もある。日本語訳は飯田氏の訳を参考にしながら筆者が施した。以下、醜女描写を中心に簡単な注を施してみよう。

〔矬肥〕原本は「智肥」に作り、「智」字のそばに「矬」が書き入れられている。飯田注が「矬肥」で解するのに従う。「矬」は背が低いこと。「矬肥」で背が低く太っている。〔臀高〕臀部が高いというのは、出っ張っているということであろう。〔面欹〕顔がゆがんでいる。〔口大而甗錡〕口が大きくてこしきのようだ。原本に「錡」字はないが、対句・押韻に合わず、字を脱していると思われる。飯田注が「錡」字を補うのに従う。「甗」はこしき。蒸すための深い鍋。「錡」は釜。「甗錡」で鍋釜の類をいうのであろう。訳では原文にあるこしきの方を用いた。〔鼻曲而累垂〕鼻が曲がっていて垂れ下がっている。〔嫫母〕第一節で触れた、古代の伝説的醜女。〔敦洽〕敦洽讎靡。『呂氏春秋』孝行覧に見える、容貌の醜い人物。陳侯に重用され、陳侯が病気の時に代理として楚に派遣されたが、醜悪な人物を使者としたことに怒った楚王により、陳は亡ぼされたという。『呂氏春秋』のこの部分の記述では明らかに男性であり、そのため本稿第一節でも取り挙げなかったが、北齊の劉晝の『劉子新論』殊好では「軒皇は嫫母の魋貌を愛し、落英の麗容に易へず、陳侯は敦洽の醜状を悦び、陽文の婉姿を賞せず（軒皇愛嫫母之魋貌、不易落英之麗容、陳侯悦敦洽之醜状、弗賞陽文之婉姿）」と、伝説的醜女の嫫母と対になり、美女である陽文の美しさと対比して用いられており、女性とする考え方もあったことが分かる。〔梁鴻妻〕第一節で触れた孟光をいう。〔許允婦〕第一節に見えた。〔遇之□嗤〕原本は単に「遇之嗤」であるが、対句に合わないことから飯田注は一字空格とする。葉本は「而」の字とする。

〔效頻〕原文は「姣頻」に作るが、飯田注が「姣」は「效」の誤りで「頻」は「顰」の意であり、前出の「顰みに倣う故事に基づいたものであるとするのに従った。

(39) この『玉房祕訣』等も、唐代に先立つ醜女を描いた文献ということになるが、文学作品とはいえないので本稿の考察の対象とはしなかった。ただ、前に挙げた作品と共通した表現や類似した表現がある場合は、その注に挙げるようにした。

(40) 伏氏第一論文はこの他に、唐代文学としては、敦煌本王梵志詩「家中漸漸貧」や「齣齣新婦文」の変文も取り挙げるが、これらは怠惰で傲慢な女性を描いたものであり、態度や行動の描写に中心があり、純粋に醜女とはいいがたいので、本稿の考察の対象とはしない。しかし、これらの資料もやはり敦煌の文献であることは示唆的である。

また、この他に、金文京氏が「唐代の手紙と文学――『杜家立成雑書要略』について」(第五四回中四国地区中国学会、二〇〇八年五月三一日、於岡山大学)と題する講演の中で、初唐の書簡文例集『杜家立成雑書要略』の中に、新婚の妻を褒められた返事として自分の妻の醜貌を描く例(「知故成礼不得往看与書」の「答」)があることを紹介され、醜女文学と関連する可能性があることを指摘された。この妻の様子は「燋齒　黑容、眞に外にすべきかと疑ふ。忽ち今　此れに對して、翻(かへ)って夜の長きを恨み、漏を引きて峻しく傾け、猶ほ曙(あ)け難きを嫌ふ(燋齒黑容、眞疑可外。忽今對此、翻恨夜長、引漏峻傾、猶嫌難曙)」(=焼け焦げたような歯・黒い顔で、人前には出せないかと疑われるほどです。今ふと妻と顔を合わせて、夜の長いのがうらめしくなり、水時計を引き寄せてひどく傾けながら、夜が明けないのをいとわしく思います)と描写されている(本文は日中文化交流史研究会『杜家立成雑書要略　注釈と研究』(翰林書房、一九九四年)によった)。このように、醜貌描写としてはごく短く、具体的描写がほとんどないことと、文学作品と見なせるかどうか疑問を抱いことにより、本稿の考察の対象とはしなかったが、上の注の中では利用してみた。なお、この『杜家立成雑書要略』の場合は、光明皇后の筆になると伝えられていることもあり、我が国で大切に保存されてきたが、唐代の同類の書簡文例集も、実用書で残すほどの価値はないと思われたらしく、俗文学の文献と同様にほとんどが散佚している。

(41)『朝野僉載』でも太鼓腹「皤腹」の描写があった。注(33)参照。

(42) ただし、19は一方で「項縮」と首の短さをも表現しており、一つの作品の中でも矛盾したような表現がある。

(43)『朝野僉載』でも「傴肩」=いかり肩という描写があった。注(33)参照。

(44) 張競氏注(1)前掲書でも、たびたび赤い唇のことは触れられている。なお、化粧下手の描写であるのでここでは比較しなかったが、唇の色については、前代では12劉思眞「醜婦賦」に化粧した様子を「朱脣如踏血」と表現しており、よく分からない表現ながら、どうやら口紅を塗りすぎて赤くなりすぎていることを表現しているようだ。これに対し、唐代では色の悪さが描かれているということは、口紅の色や塗り

方の流行の変化を反映している可能性もあるかもしれない。

(45) 注でも述べたように、『杜家立成雑書要略』でも黒い歯が描写されており、注(40)前掲書では、歯を黒く染める風習との関わりが指摘されている。

(46) 宋以後の状況に関しては、伏氏第一論文で触れられており、明の徐禎卿の「醜女賦」や清初の汪琬の「醜婦賦」などの作品が挙げられている。前者については、段学紅「『醜女賦』簡析」(『名作欣賞』一九九九年第四期)の専論がある。

〔附記〕本稿は、中国中世文学会平成十九年度研究大会(二〇〇七年一〇月二七日、於広島大学)における口頭発表をもとに手を加えたものである。当日司会をしてくださった佐藤大志氏をはじめ、貴重なご教示・ご指導をいただいた多くの方々に、深く感謝の意を表したい。